

大湯環状列石

発掘調査報告書(8)



1992-3

秋田県鹿角市教育委員会

序

特別史跡「大湯環状列石」及びその周辺の解明を目的に継続してまいりました発掘調査も8年目を迎えました。

これまでの調査は、大湯環状列石の北側を中心とする地域をその対象地としておりましたが、本年度は以前より配石遺構の存在が知られていた万座環状列石南120mの地域を対象地を選び、調査を進めてまいりました。

調査の結果、配石遺構群、フラスコ状土塊、Tピット等の検出のほか、縄文土器、石器、土製品が出土しました。配石遺構群は、弧状を描くように配置されており、大湯環状列石の性格や構造を紐解く上で貴重な資料といえます。

本書は、これらの調査をまとめたものであり、大湯環状列石とその周辺が史跡公園にふさわしい姿として保存・活用されるための資料といたしたいと思います。

終わりに、この調査に際し、ご指導ご協力いただきました文化庁並びに秋田県教育委員会、関係各位に心から感謝申し上げるとともに、今後の調査につきましてもご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成4年3月

鹿角市教育委員会

教育長 杉山新吉

例 言


1. 本報告書は、平成3年度に国・県の補助を得て実施した大湯環状列石第8次発掘調査の報告書である。
2. 本調査の概要については機会あるごとに発表してきたが、本報告書を正式なものとする。
3. 本報告書の執筆は、調査員・調査補助員が分担し、文責は各々の文末に記した。
4. 資料の鑑定並びに同定等は下記のとおり依頼した。

石器類石質鑑定	秋田県立十和田高等学校	鎌田 健一
赤色顔料分析	秋田県立十和田高等学校	鎌田 健一
花粉分析	鹿角市理科教育センター	成田 典彦

5. 土層、土器などの色調の記載には「新版・標準土色帖」(日本色彩研究所)を使用した。
6. 遺物の実測・採拓・トレース等の整理作業は、調査員・調査補助員が行なった。
7. 本報告書に記載した図版のスケールについては各々に示した。なお、写真図版は任意の縮尺とした。
8. 本報告書の文中において、用語の主たるものは統一するように努めたが、数度にわたり使用しているものは簡略している場合もある。
9. 図版で下記のような記号やスクリーン・トーンを使用した。

S K……土 壤 S K(F)……フラスコ状土壌 S K(T)……Tピット

S X(F)……焼土遺構 S X(S)……配石遺構

……遺構確認面以下の土層 ……焼土

10. 発掘調査・報告書作成にあたっては、下記の方々から御指導・御助言をいただきました。記して感謝の意を表します。(敬称略、順不同)

須田 勉、松村恵司(文化庁記念物課)、牛川喜幸(奈良国立文化財研究所)

藤本英夫(北海道文化財研究所)、村越 潔(弘前大学)、小林達雄(国学院大学)

阿部義平(国立歴史民俗博物館)、渡辺 誠(名古屋大学)、工藤雅樹(福島大学)

林 謙作(北海道大学)、中野益男(帯広畜産大学)、種市幸生(北海道教育委員会)

高樫泰時(秋田県埋蔵文化財センター)、葛西 勲、高橋 潤(青森山田高等学校)

鈴木克彦、成田滋彦(青森県埋蔵文化財調査センター)、遠藤正夫(青森市教育委員会)

安村二郎(鹿角市史編さん室)、板橋範芳(大館市教育委員会)、佐藤 樹(秋田県文化財

保護管理指導員)

本文目次

序

例言

本文目次

函版・P L・表目次

第Ⅰ章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と立地 1
2. 遺跡の層序 2

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査要項 6
2. 調査の方法 7
3. 調査の経過 7

第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

1. 配石遺構 10
2. 礎群 19
3. 土壌
 - (1) Tピット 21
 - (2) フラスコ状土壌 21
 - (3) 土壌 26
4. 焼土遺構 29
5. ピット 30
6. 遺構外出土遺物
 - (1) 土器 31
 - (2) 石器 45
 - (3) 土製品 51

第Ⅳ章 自然科学的調査

1. 花粉分析からみた古環境について 53

第Ⅴ章 分析と考察

1. 配石遺構群について 55
2. フラスコ状土壌について 57

第Ⅵ章 調査のまとめ 60

P L 19	土壌②	81	P L 28	遺構外出土土器(1)	90
P L 20	焼土遺構・ピット(1)	82	P L 29	遺構外出土土器(2)	91
P L 21	ピット(2)	83	P L 30	遺構外出土土器(3)	92
P L 22	ピット(3)	84	P L 31	遺構外出土土器(4)	93
P L 23	土器出土状況	85	P L 32	遺構外出土土器(5)	94
P L 24	基本層序	86	P L 33	遺構外出土土器(6)	95
P L 25	調査区北東側配石遺構群近景	87	P L 34	遺構外出土土器(7)	96
P L 26	調査区全景(調査後)	88	P L 35	遺構外出土土器(1)	97
P L 27	遺構内出土土器	89	P L 36	遺構外出土土器(2)・土製品	98

表目次

第 1 表	遺物観察表(土器)	29	第 6 表	遺物観察表(土製品)	52
第 2 表	遺物観察表(土器)	42	第 7 表	板状土製品地区別出土数	52
第 3 表	遺物観察表(土器)	43	第 8 表	検出された花粉化石の固体数	54
第 4 表	遺物観察表(土器)	44	第 9 表	フラスコ状土壌底部ピットの有無	59
第 5 表	遺物観察表(石器)	50	第 10 表	フラスコ状土壌底部形態分類表	59

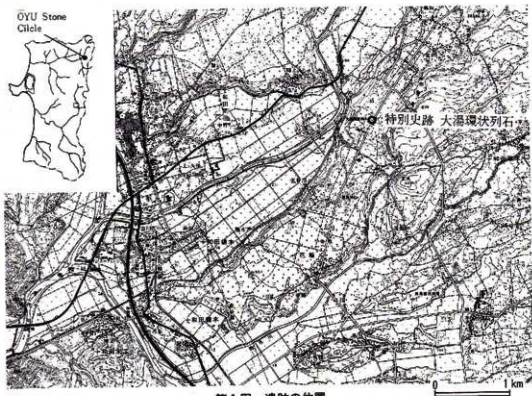
第I章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と立地

鹿角市は、秋田県北東部に位置し、壮年期の山々と盆地からなる。鹿角盆地を米代川が北上し、十和田地区で小坂川、大湯川と合流し、その流れを変え、大館盆地へと西流して行く。それらの河川及び支流によって形成された段丘、舌状台地が鹿角盆地の複雑な地形を作り出している。その段丘、舌状台地上には縄文時代から近世までの遺跡が400ヶ所以上分布している。

特別史跡「大湯環状列石」(第1図)もその一つで、秋田県鹿角市十和田大湯字野中堂、字万座、字一本木後口に所在する。同遺跡の載る台地は、大湯川と豊真木沢川の浸食作用によって形成された南西方向へ延びる長さ5.6km、幅0.5~1km、標高150~190mの舌状台地で、通称「風張台地」と呼ばれている。遺跡はこの台地のほぼ中央、一本木、寺坂両集落の中間に位置し、JR東日本花輪線十和田南駅の北東3.5km、東北縦貫自動車道十和田1・Cの北東3.6kmの地点にある。

本年度の発掘調査区(G₁区)は、万座環状列石の南側110~170mの県道沿いに位置する。標高176~179mで、現地表面では境界を挟んで多少の段差があり、北西方向へやや傾斜している。なお、現在は畑地及び資材置き場として利用されている。(花海義人)



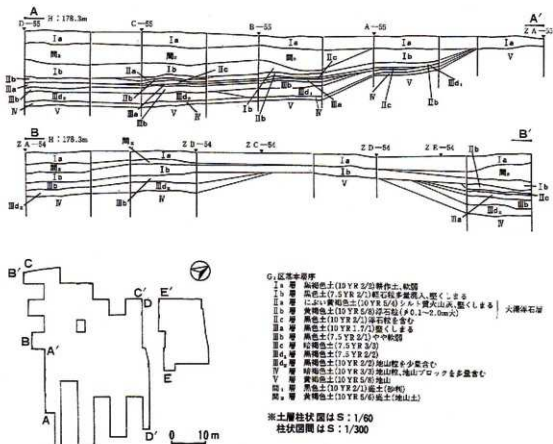
第1図 遺跡の位置

2. 遺跡の層序

遺跡の層序(第2図・3図)については、第7次調査までの分層、細分基準をもとにI~V層に分層し、さらにその色調、堅さ、混入物により2~5層に細分した。

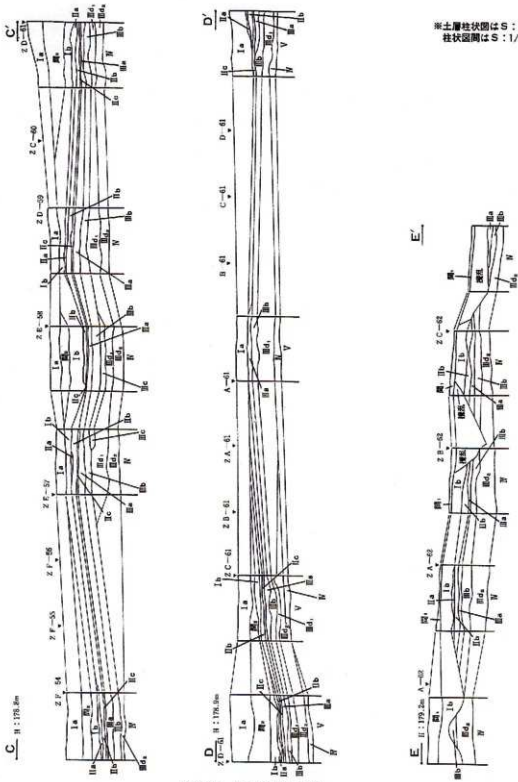
第I層は大湯浮石層までの黒色土で2層(Ia, Ib)に分層できるが、いずれも耕作土である。層厚は20cm~60cmを測る。なお、調査区北東側道路部分はIa層を除去し、Ib層上に砂利等(間1)が敷かれていた。また、調査区南東側から北西側にかけては、Ia, Ib層間に地山土の堆積(間2)がみられた。昭和初期の耕地整理の際に小丘部を削平、その土を移動したものと考えられる。

第II層は十和田火山噴火時の噴出物で、大湯浮石層とよばれているものである。3層に細分される。IIa層はにぶい黄褐色火山灰で、層厚2cm~6cmを測り、シルト質である。IIb層は黄褐色を呈する粒径0.1cm~2cmの浮石層で、層厚2cm~10cmを測る。IIb層下には浮石粒を含む黒



第2図 G, 区基本層序(1)

粘土層柱状図は S : 1/60
 柱状図間は S : 1/300



第3図 G区基本層序(2)

色土のⅡc層があり、層厚は2cm～6cmを測る。

第Ⅲ層は、大湯浮石層下から暗褐色土（Ⅳ層）上面までの黒色土、暗褐色あるいは黒褐色の堆積土である。混入物（地山粒等）の含有量、明彩度、しまり等から5層（Ⅲa～Ⅲd₂）に細分した。Ⅲa層は黒色土でほとんど混入物を含まず、非常に堅くしまっている。Ⅲb層はⅢa層と同色であるが、しまりの点でやや劣っている。Ⅲc層は、チョコレート色に近い暗褐色の堆積土で、調査区北西側に所々堆積しているにすぎなかった。層厚は8cmを測る。Ⅲd₁層は混入物の含まない黒褐色土で、Ⅲd₂層よりはやや明るい色調を呈している。Ⅲd₂層は第1次～第7次調査までのⅢd層にあたるもので、地山粒を含む黒褐色の堆積土である。層厚はⅢd₁層が6cm～26cm、Ⅲd₂層が6cm～28cmを測る。

大湯環状列石周辺では、このⅢ層が遺物包含層としてとらえられているが、本調査区においてはⅢa～Ⅲd層で、縄文時代の遺物が出土している。また、土壌、プラスチック状土壌等の確認及び構築面はⅢd層上面である。

第Ⅳ層は、地山直上の暗褐色を呈する堆積土で、若干粘性があり、地山粒、ブロックを多く含んでいる。第Ⅴ層は、甲ヶ野火山灰と考えられる黄褐色火山灰の層で、本報告書では地山ともよんでいる。調査区北東側では、本層まで攪乱のおよんでいる地域もみられる。Ⅴ層下には、シラス層（Ⅵ層）が堆積し、プラスチック状土壌、Tピットなどの掘り込みの深いものは、底部が本層までおよんでいるものもある。
(花海義人)



第4図 調査区と周辺の地形

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査要項

- | | |
|---------------------------|--|
| 1. 遺跡名 | 特別史跡 大湯環状列石 |
| 2. 調査目的 | 万座環状列石の南西120mの地点でその一部が発見されていた配石遺構群の広がり、形態及び保存状況を確認し、史跡整備計画立案の基礎資料とする。 |
| 3. 調査地 | G ₁ 区 |
| 4. 発掘面積 | 1,519㎡ |
| 5. 調査期間 | |
| 発掘調査 | 平成3年7月1日～11月28日 |
| 遺構復元、埋め戻し作業 | 平成3年11月29日～12月4日 |
| 整理・報告書作成 | 平成3年12月5日～平成4年3月31日 |
| 6. 調査主体者 | 鹿角市教育委員会 |
| 7. 調査担当者 | 社会教育課（主任 秋元信夫、主事 藤井安正） |
| 8. 調査参加者 | |
| 調査指導員 | 熊谷太郎（秋田県教育庁文化課 学芸主事） |
| 調査員 | 鎌田健一（秋田県立十和田高等学校 教諭）
成田典彦（鹿角市理科教育センター 専任）
三ヶ田俊明（鹿角市立中滝小学校 教諭） |
| 調査補助員 | 花海義人、米田直毅、伊藤裕幸（9月退職）、高木 晃
木村昭子、渡辺幸枝 |
| 作業員 | 大森静子、金沢栄子、木村イヨ、木村千鶴江、千葉昭子、苗代沢ノブ
松宮カチ、宮沢カヨ、宮沢キヨ、宮沢トミエ、柳沢アエ、柳沢恵美子
柳沢勝江、柳沢ヤス、柳館ユリ |
| 9. 社会教育課 | |
| 課長 | 川又節三 |
| 課長補佐兼
大湯環状列石
整備対策室長 | 小笠原 昇 |
| 主 任 | 秋元信夫（調査・庶務） |
| 主 事 | 藤井安正（調査） |
| 臨時職員 | 古川季政（庶務） |

10. 協力機関・協力者

文化庁記念物課、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、十和田宮林署
柳沢義人（土地所有者）、石山愛子（土地所有者）

2. 調査の方法

本年度の調査の主目的は、昭和31年にその一部が発見されていた配石遺構群の分布範囲及び保存状況を確認することであった。このため、配石遺構群の広がり予想された万座環状列石の南110～170mに調査区（G₁区）を設定した。

グリッドは第1次調査以来のN-49-Wを基準とする5m単位のグリッドとし、F₂区から延長した。杭番号はアルファベット（北西～南東方向）と算用数字（北東～南西方向）で付し、西隅の杭を以ってグリッドを呼称した。

表土からの除去作業は全て手掘りに依る分層発掘とし、できるだけ上層での遺構確認に努めた。遺構の番号については、701番から種類別、発見順に付した。ただし、フラスコ状土壌、土壌、Tピットについては遺構確認時での識別が困難であるため、一連の番号で順次付した。なお、調査結果から遺構としたいと判断されるものは欠番とし、また土壌から配石遺構へ変更した遺構もあり、調査時と本報告書の遺構番号には多少の異同がある。

遺構精査は、配石遺構については四分画法、土壌等については二分画法を原則とした。遺構等の実測については簡易遠り方測量を用い、配石遺構は1/10、その他は1/20の縮尺で図化した。

遺構外の出土遺物については、各グリッド、各層ごとに一括して取り上げ、遺物カードを同封することとした。なお、遺物の密集地域に関しては、出土レベル、出土状況を図化した。遺構内からの出土遺物については、出土地点を記録した。

また、古環境復原のため、基本層序及び第716号フラスコ状土壌から土壌サンプルを採集し、花粉分析を行なった。

写真撮影には、2台のカメラを使用し、調査各段階の状況を白黒、リバーサルフィルムに取めた。
(米田直教)

3. 調査の経過

特別史跡大湯環状列石の第8次発掘調査は、7月1日から開始し、全調査を終了したのは11月28日であった。以下、調査日記に基づいて、調査経過の概要を述べる。

7月1日、作業員への作業説明の後、グリッド設定及び粗掘りを行う。なお、土置場の確保と調査区内の遺構、遺物の分布密度を確認するため、粗掘りは南西端の55ラインのグリッドから開始し、続いて中央部をとるZAラインに移行することとした。

55ラインの粗掘りは、南東側から北西側に向って進められ、7月中旬には北西端に達した。同ラインからは配石遺構1基と礫群が確認され、配石遺構は北東端で以前発見されていた配石遺構群の南西端になるものといっとき喜んだ。

ZAラインの粗掘り及び遺構確認は8月初日までに完了、フラスコ状土壌4基、焼土遺構1基及びピット2個が確認された。なお、これらの遺構のほとんどが、発掘区中央部から南西部にかけて確認されていることから、G₃区南西側調査区(畑地部分)に関しては小丘部周辺の分布密度が高いものと予想された。このため、小丘部及びその周辺の調査に主力を注ぐこととし、その他の部分については幅5mのトレンチ法で調査を行うこととした。

8月中旬には、南東端から南東部の粗掘りを行うとともに、これまで確認された遺構の精査に取りかかる。同月下旬には粗掘りも中央部及びその周辺にまで及び、新たにフラスコ状土壌3基、土壌2基が確認されている。

9月9日からは、南西側の調査と併行し、北東側調査区の調査にも着手した。除草、廃材の撤去、整理後、発見当時の面を表出し、9月13日より配石の現況を記録した。

9月19日には、十和田高校のふれあい体験学習に協力、一年生41名を受け入れ、実測、遺構確認、精査等の作業指導を行なった。

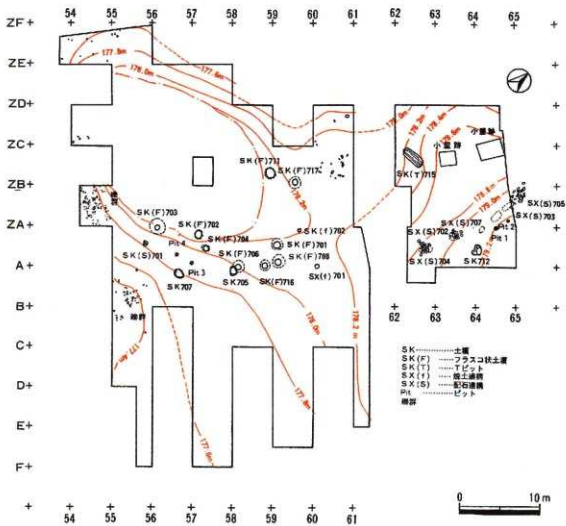
9月末までには、南西側調査区では、北西部の調査に移行し、フラスコ状土壌2基が確認され、また、北東部調査区では攪乱部分の覆土の除去、石の図化、取り上げを繰り返し、未攪乱面の表出を完了している。この時点で、配石遺構3基を再確認し、さらに層的な掘り下げにより、10月中旬には上部配石を消失しているものの下部土壌の確認から2基の配石遺構の存在が予想された。また、Tピット、土壌各1基、柱穴状ピット2個も確認されている。

10月19日には現地説明会を開催し、悪天候にもかかわらず60名余の参加者があった。

10月末には、南西側調査区では北西部の調査を終了。11月からは西部及び西端部の調査へ移行した。一方、北東部調査区では11月7日までに4基の配石遺構の調査を終了し、配石群の南側への広がりを確認するため調査区の拡張を行う。同時に配石遺構以外の遺構の調査を継続、19日にはその調査を完了している。なお、25日には拡張部分より新たに1基の配石遺構が確認され、翌26日より精査を開始した。

11月21日には南西側の調査をほぼ終了し、22日には同区的全景撮影をした。翌日からは北東側の調査に主力を注ぎ、合せて、基本層序図の作成を行なった。27日には同区的全景写真を撮影、28日には全ての調査を終了した。雨天や台風19号の影響で予定を1ヶ月も超過し、終盤は寒さが身にしみた調査であった。なお、翌29日から配石遺構の復元及び遺構の埋め戻しを行い、全ての作業を終了したのは12月4日であった。

(花海義人)



第5図 グリッド及び遺構配置図

第三章 検出遺構と出土遺物

G₁区において検出された縄文時代の遺構は、配石遺構^(注1)7基、Tピット1基、フラスコ状土壌9基、土壌3基、焼土遺構2基、ピット4個、礫群1ヶ所の計27である。また、遺構内・外より復元土器11点とダンボール箱2箱の縄文土器破片のほか、石器及び剣片27点、土製品5点が出土している。

1. 配石遺構 (第6図、7図)

第701号配石遺構 (第8図)

調査区南西部のZA-55グリッドに位置しⅢ_{d1}層上面において確認した。本遺構のみが配石遺構群と離れて位置している。

配石は、20~40cm大の扁平な川原石4個を径60cm内に並べ置くものである。

配石下より検出された土壌は、配石と位置がほぼ一致する。平面形は円形を呈し、長軸65cm、短軸60cm、深さ27cm、底面積0.88㎡を測る。

土壌はⅢ_{d1}層より掘り込まれ、V層上面を底面としている。底面にはこまかな起伏がみられるが、平坦な感じを受け、堅くしまっていた。壁は底面よりわずかに外反して立ち上がる。堆積土は単一ブロックで、人為堆積と判断された。堆積土の色調は、Ⅲ_{d1}層と同色を呈するが地山粒の混入、土壌の隙間より基本層とは区別できた。

遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は、遺構確認面および周辺出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

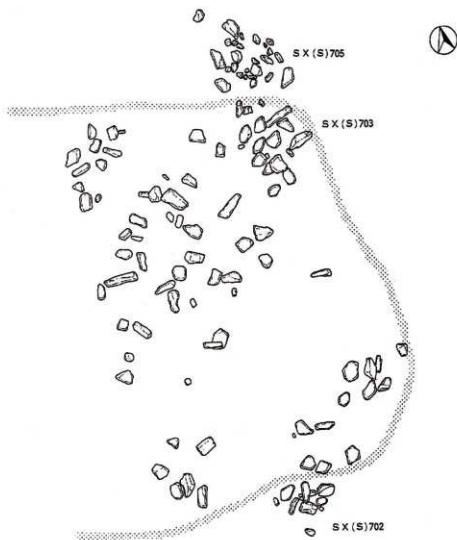
第702号配石遺構 (第8図)

配石遺構群の南側、ZA-63グリッドに位置する。調査前の踏査によりその一部が確認されていたものである。Ⅲ_{d2}層でその全容が明らかとなった。南側に第704号配石遺構、北側に第707号配石遺構が近接している。第11図のEに当るものと考えられる。当時の状況と比べると、中央の立石や配石内の小さい石が移動されているが、原形を異にするまでではない。

配石遺構は、縁辺部に8個の立石を楕円形に一巡させ、この内部に4個の平石を重ね置いた構造をもち、その規模は長軸100cm、短軸75cmを測る。使用される石は扁平で長いものや、柱状のものがみられ、長さ30~49cmを測る。縁辺部の立石は遺構構築面より20cm程表出している。

配石下より検出された土壌は、配石と位置が一致する。平面形は楕円形を呈し、長軸131cm、短軸100cm、深さ49cm、底面積1.90㎡を測る。土壌長軸方向はN-55°Eである。

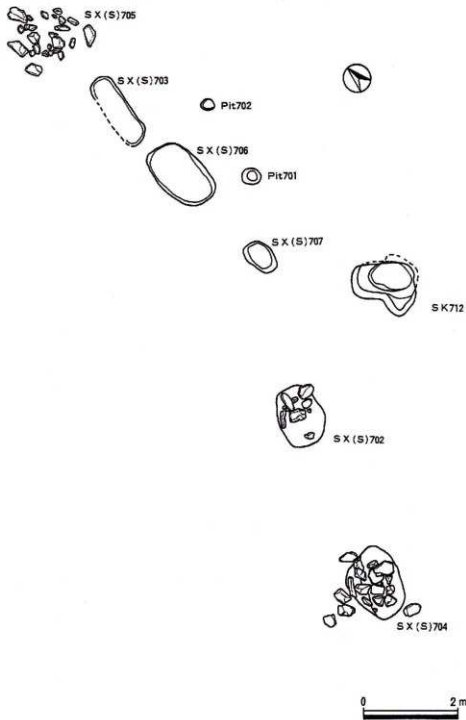
土壌はⅢ_{d2}層を掘り込み、V層上位を底面とする。底面は小さな起伏をもち、北側に向かって



※ スクリーン・トーン内の石は移動された
又はその可能性がある。

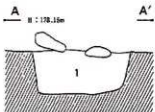
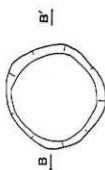
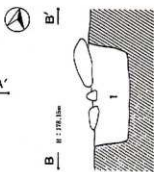
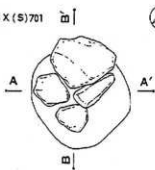


第6図 配石遺構群確認状況図



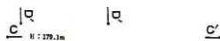
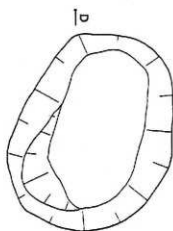
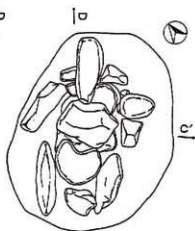
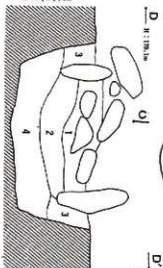
第7回 配石遺構群実測図

SX(S)701



1層 黒色土(10Y R2/1)ローン状、小礫を少量含む

SX(S)702



- 1層 黒色土(10Y R2/1)地山粒少量含む。やや堅くしめる
- 2層 黒色土(10Y R1.7/1)地山粒若干含む
- 3層 黒色土(10Y R2/1)地山粒少量含む
- 4層 黒色土(10Y R1.7/1)褐色土、高粘性土を含む。やや堅くしめる。



第8図 第701号・702号配石遺構実測図

ゆるやかに傾斜している。壁は底面より外反して立ち上がるが、西壁の度合が大き。堆積土は5ブロックに区分された。地山粒等の混入から人為堆積と判断された。本遺構内の堆積土を持ち帰りフルイがけを行ったが、少量の炭化物が出土したに過ぎなかった。

遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は、遺構確認面および周辺出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

第703号配石遺構（第9図）

配石遺構群の北側、Z B-64グリッドに位置する。図版に記載した石については、攪乱により移動された可能性が極めて高い。第11図のBに相当するものと考えられる。第11図及びP L 2-3によると、配石は縁辺部に立石を巡らし、中央に立石をすえた構造となっている。

下部土壌は、Ⅲd層において確認された。西壁を中心に大きく破壊されていた。平面形は小判形を呈し、長軸145cm、推定短軸55cm、深さ62cm、推定底面積2.32㎡を測る。長軸方向はN-6°-Eである。

土壌はⅢd層から掘り込み、V層上位を底面とする。底面はこまかな起伏をもつが平坦な感じを受け、堅くしまっていた。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は4ブロックに区分された。地山粒を多く含むことから人為堆積と判断された。

遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は、周辺出土遺物より縄文時代後期前葉と考えられる。

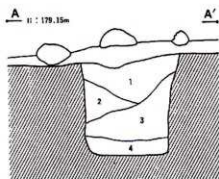
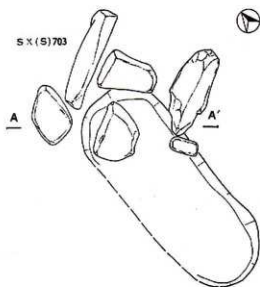
第704号配石遺構（第9図）

配石遺構群の南端のZ A-62グリッド、Ⅲd層上面において全容を確認した。本調査において新たに確認したものである。北側2mの地点に第702号配石遺構が近接する。配石群の中では標高の低い地域に位置する。

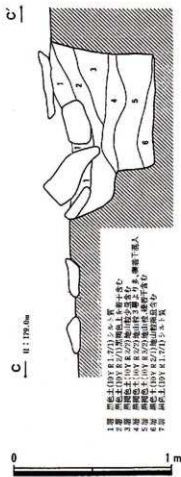
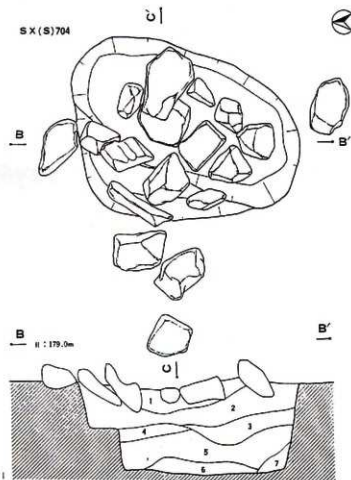
配石は、縁辺部に9個の立石を一巡させ、内部に2個の平石を置いた構造をもつもので、その規模は長軸90cm、短軸75cmを測る。使用される石は扁平なものと、柱状のものがあり、長さ44~55cmを測る。縁辺部の立石は構築面より15~20cm表出している。

配石下より検出された土壌は、配石と位置が一致する。平面形は楕円形を呈し、西側に張り出しをもっている。長軸154cm、短軸80cm、深さ66cm、底面積2.87㎡を測る。長軸方向はN-27°-Eである。張り出しは半月状を呈し、底面より20cm程高い。構築材設定のための施設と考えられる。

土壌はⅢd層を掘り込み、V層上位を底面とする。底面はゆるやかな起伏を呈し、堅くしまっていた。壁は西側が階段状を呈するほかは、底面より外反して立ち上がる。堆積土は7ブロッ



- 1層 黒褐色土(10Y R2/2)ローム粒少量含む
 2層 黒色(10Y R2/1)地山粒を微量含む
 3層 黒褐色土(10Y R2/2)地山粒を少量含む、全体的にやわらかい
 4層 黒褐色土(10Y R2/2)地山粒を少量含む、重くしる



第9図 第703号・704号配石遺構実測図

クに区分され、地山粒の混入から人為堆積と判断した。

遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は、周辺出土遺物及び確認面から縄文時代後期前葉と考えられる。

第705号配石遺構（第10図）

配石遺構群の北端部に位置する。本調査前の踏査においてその一部が確認されていたものである。遺構の大半が調査区外に存在することから地権者の協力を得て、現況図のみ作成した。第11図のAに相当するものである。

配石は、楕円形に10個程の立石を一巡させ、中央に立石を置くものである。縁辺部の立石には扁平な石が使用されている。その長軸規模は90cmを測る。なお、ボーリング調査を行った結果、中央立石下にはやや大きめの石が存在すること、下部に土壌が存在することが確認された。

本遺構の構築時期は、他配石と同様の時期が与えられよう。

第706号配石遺構（第10図）

配石遺構群の中央、Z B-64グリッドに位置し、東側にピット1、2が近接している。擾乱を受けており配石及び土壌上部を消失している。第11図のCに相当するものである。第11図及びP Lでは、配石は縁辺部に石を巡らし、中央に立石をもった構造となっている。図中には「地中にすえた石」が一面みられることから縁辺部には立石が巡らされていたものと考えられる。

土壌はⅢ_{da}層下位で確認された。本来は他遺構と同様にⅢ_{da}層上面であったものと考えられる。平面形は楕円形を呈し、長軸155cm、短軸90cm、深さ40cm、底面積3.72㎡を測る。長軸方向はN-0°-Sである。

底面はこまかな起伏をもつが平坦な感じを受け、堅くしまっていた。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がる。地積土は3ブロックに区分された。地山粒、ブロックを多量に含むことから人為堆積と判断した。

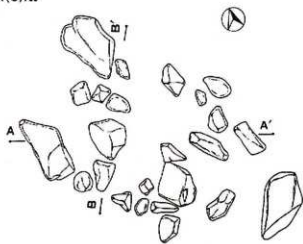
遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は、周辺の出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

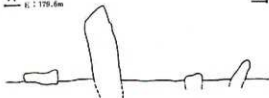
第707号配石遺構（第10図）

配石遺構群の中央、Z A-64グリッドに位置する。擾乱により配石及び土壌上部を消失している。第702号及び706号配石遺構に挟まれているほか、南西1.5m地点に第712号土壌が近接している。第11図のDに相当するものと考えられる。

SX(S)705

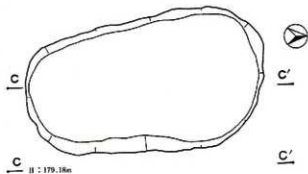


A
E: 179.6m

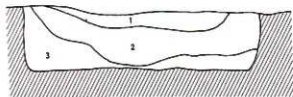


A'

SX(S)706

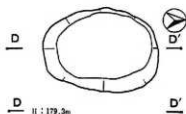


C
H: 179.18m

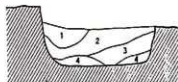


- 1層 黒褐色土(10Y R 2/3)地山アブロック多数混入
- 2層 黒褐色土(10Y R 1.7/1)ややしめる、地山アブロック少量混入
- 3層 黒褐色土(10Y R 1.7/1)やや軟弱、地山粒少量混入

SX(S)707



D
H: 179.3m

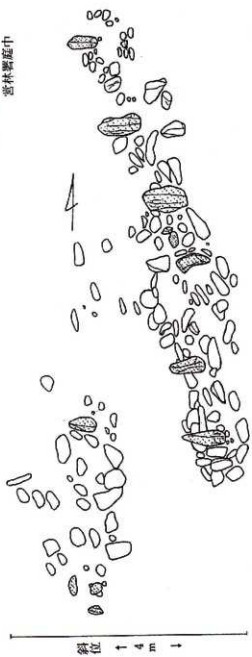


- 1層 黒色土(10Y R 2/1)地山粒少量混入
- 2層 黒褐色土(10Y R 2/2)地山粒、地山アブロック少量混入
- 3層 黒褐色土(7.5Y R 2/1)地山粒少量混入
- 4層 黒褐色土(10Y R 2/2)

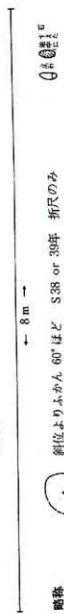
0 1 m

第10図 第705号~707号配石遺構実測図

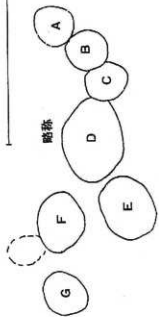
万盛siteより約70m 花輪側
密林罅庭中



※本図は阿部義平氏が昭和38～39年に
実測したものである。
※観察事項等については内容をかえず
活字化した。



斜位よりふかん 60°ほど S38 or 39年 折尺のみ
石は齧いた(手を加えた)可能性



第11図 配石遺構群略図(昭和38～39年当時)

土壌はⅢd層下位において確認された。平面形は楕円形を呈し、長軸73cm、短軸52cm、深さ37cm、底面積0.81㎡を測り、規模的には最も小さい。長軸方向はN-O¹-Sである。

底面はこまかな起伏をもち、堅くしまっていた。壁は底面より外反して立ち上がる。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積と判断された。

遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は、周辺の出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

注1：配石遺構7基の内、第701号・704号配石遺構を除く5基については、昭和31年にその存在が知られていた。発見から精査前までの経緯は以下の通りである。

昭和31年、十和田常林署は民有地を借り入れ、事務所兼住宅建設を計画した。これに伴って行われた整地作業時に配石遺構の一部が発見され、その存在が地元の郷土史家に報告された。事務所建設が配石遺構周辺であったことから、郷土史家より遺跡保存の要請があり権を巡らすなどの保存対策が講じられた。昭和45年頃、事務所移転と共に借入地は所有者に返還され資材置場として利用され現在に至っている。

第11図、PL2・3は、昭和38～39年に阿部義平氏によって実測、撮影されたものである。この実測図、写真を見ると7基の配石遺構が存在し、内帯・外帯からなる配石遺構群を構成している。しかも外帯の各配石の中央には立石が存在し、A区配石遺構群の外帯配石とは形態を異にするものであった。

本調査前に、現地を踏査した時点では配石遺構の一部が建設資材の隙間から確認できた。調査に入り、除草、廃材整理後、注意深く配石遺構の全容露出を試みたが、配石遺構群中央部は石の移動が目立ち昭和38～39年の状況とは趣を異にしていた。

2. 礫群 (第12図)

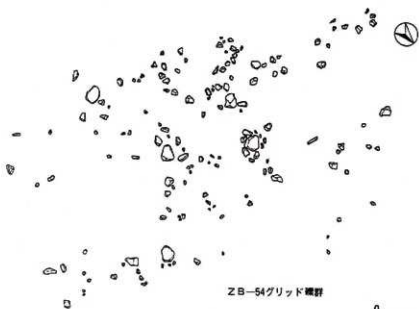
調査区西端及び南西端より多数の礫が検出された。礫は、配石遺構を構築する石とは大きさ、形状において明らかに異なり、人為的に配置された状況も認められない。

これらの礫は、調査区中央部にある小丘状微高地からゆるやかに落ちる斜面もしくは斜面下に多くみられ、特にZB-54・A-55グリッドの分布密度が高い。Ⅲ層～Ⅳ層上面からの出土が多い。礫を観察すると角礫が多く、大きさは5～23cm程を計る。石質は石英閃緑玢岩、流紋岩、安山岩、礫岩、火山礫凝灰岩、変朽安山岩、泥岩と多種で、前2者が多くみられる。

本来、この種の礫はⅢ層～Ⅳ層中には見受けられないものである。A区、C区においても礫群を確認し、分析では水流などの自然的要因によるものとは考えにくいことが指摘されている。このようなことから、縄文人が何らかの目的をもって搬入したものと考えている。このほかに



A-55・B-55グリッド標群



ZB-54グリッド標群



第12図 標群実測図

遺構構築の際、土砂とともに掘り上げられたV層・VI層中の礫をある一定の場所(G₂区は低地)に投げ捨てたということも考えられ、一つの可能性として提示しておきたい。(藤井安正)

3. 土壌

(1) Tピット

第715号Tピット (第13図)

調査区北部、ZC-62グリッドに位置し、III_d層下位において黒色を呈する長楕円形の落ち込みを確認した。本遺構は、配石遺構の位置する微高地から西側へ緩やかに傾斜する地点に位置する。本来の掘り込み面はIII_d層上面または上位であったものと考えられ、本土壌の深さは現状より10~15cm深いと考えられる。

規模は長軸296cm、短軸110cm、深さ157cmを測り、長軸方向はN-89°-Eである。堆積土は11層に分層され、自然堆積と判断された。図中の黄橙色土、黄褐色土は壁崩壊土である。壁はIII_d層下位~V層を掘り込み、VI層上位までを壁面とする。ピット横断面はY字状、

縦断面は底面両端が真に向かって掘り込まれた下膨れ状を呈する。底面は幅広で、中央部に向かって緩やかに傾斜し、軟弱である。

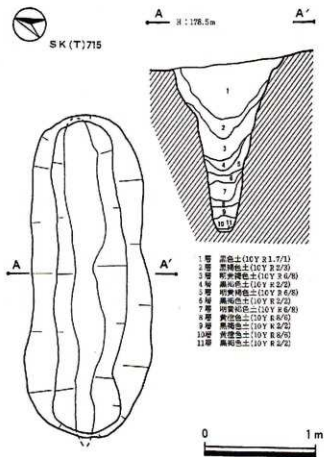
ピット内より遺物は出土しなかった。

(米田直哉)

(2) フラスコ状土壌

第701号フラスコ状土壌 (第14図)

調査区中央部のZA-59グリッドに位置し、III_d層下面において白色粘土が混入した黒色土の落ち込みを確認した。本土城南東側には第708号フラスコ状土壌が近接する。



第13図 第715号Tピット実測図

口径は84cm×90cmの円形を呈し、底径142cm×140cm、確認面からの深さ120cmで、その底面積は1.62㎡を測る。

堆積土は4ブロックに区分され、地山粒が多量に混入されていることから、人為堆積と判断した。

Ⅲ_d層を掘り込む壁は、Ⅴ層上位までとし、壁面は底面より内傾して立ち上がる。底面は平坦で堅くしまり、中央には長径32cm、深さ8cmのピットが確認された。遺構内より遺物は出土しなかった。

第702号フラスコ状土壇（第14区）

調査区南西部のZ A-57グリッドに位置し、Ⅴ層において黒色土の落ち込みを確認した。本土壇は、整地時の攪乱により上部を削られ、その底面が残されているだけであった。

規模は、底径112cm×102cm、底面積は0.95㎡を計り、本来の深さは不明であるが、周辺の同土壇から判断して、1m以上はあったと判断される。

堆積土は5ブロックに区分され、黒色土中に地山粒、ブロックが混入されていることから、人為堆積と判断した。底面は平坦で、堅くしまる。

遺構内より遺物は出土しなかった。

第703号フラスコ状土壇（第14区）

調査区南西部のZ B-56グリッドに位置し、Ⅴ層において地山粒の混入した黒色土の落ち込みを確認した。本土壇は小丘部上に構築されている。

規模は、底径200cm×192cm、確認面からの深さ160cm、底面積3.17㎡を測る。

9ブロックに区分される堆積土は、地山粒を含む黒色土が充填されていることから、人為堆積と判断した。

壁はⅤ層より掘り込まれ、Ⅵ層（シラス）までを壁面とし、底面より内傾して立ち上がる。平坦で堅くしまる底面には、長径20cm、深さ12cmのピットが中央部に確認された。

遺構内から遺物は出土しなかった。

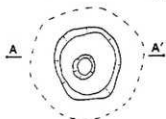
第704号フラスコ状土壇（第14区）

調査区南西部のZ A-57グリッドに位置し、Ⅲ_d層上面において、地山粒と白色粘土の混入した黒色土の落ち込みを確認した。本土壇西側には第702号フラスコ状土壇が近接する。

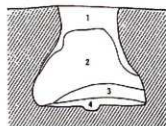
底径172cm×160cm、確認面からの深さは140cmを測り、底面積は2.15㎡である。

堆積土は5ブロックに区分され、地山粒、ブロックが多量に混入していることから、人為堆

SK(F)701



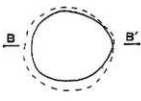
A H: 178.5m A'



SK(F)701

- 1層 褐色土(10Y R 1.7/1)粘土状白色土多量混入
地山ブロック
地山砂多量混入
2層 明黄褐色土(10Y R 6/8)地山ブロックを多量に含む
3層 暗褐色土(10Y R 2/2)地山、褐色土を少量含む
4層 褐色土(10Y R 1.7/1)シルト質、ローム粒少量含む

SK(F)702



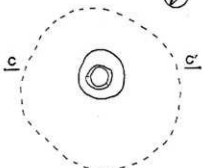
B H: 178.5m B'



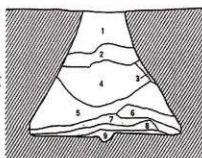
SK(F)702

- 1層 褐色土(7.5Y R 2/1)地山ブロック
地山砂多量混入
2層 明黄褐色土(10Y R 2/2)地山ブロック少量混入
3層 暗褐色土(10Y R 2/2)地山ブロック多量混入
4層 赤色土(7.5Y R 2/1)地山ブロック少量混入
5層 明黄褐色土(10Y R 6/8)褐色土少量混入

SK(F)703



C H: 177.2m C'



SK(F)703

- 1層 褐色土(7.5Y R 2/1)地山小ブロック多量混入
ローム
2層 明黄褐色土(10Y R 6/6)やや軟弱、粘土質
3層 明黄褐色土(10Y R 6/6)褐色土多量混入、軟弱
4層 黄褐色土(10Y R 5/6)ややしるる
5層 褐色土(10Y R 4/6)地山中ブロック多量混入
ややしるる
6層 暗褐色土(10Y R 3/3)粘質、褐色土多量混入
7層 褐色土(7.5Y R 2/1)軟弱
8層 褐色土(7.5Y R 2/1)明黄褐色土多量混入
粘質
9層 褐色土(10Y R 1.7/1)軟弱

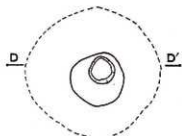
SK(F)704

- 1層 褐色土(10Y R 1.7/1)地山砂、白色粘土
粘土粒若干含む
2層 明黄褐色土(10Y R 6/6)小塊を少量含む
3層 褐色土(10Y R 4/6)地山ブロック、粘土を含む
暗褐色土を少量含む
4層 褐色土(10Y R 1.7/1)シルト質、しるる
5層 褐色土(10Y R 1.7/1)シルト質、しるる

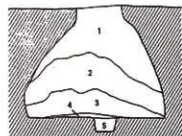
SK(F)705

- 1層 明黄褐色土(10Y R 6/6)地山ブロック
2層 褐色土(10Y R 2/2)地山砂少量混入
3層 赤色土(10Y R 2/1)地山砂少量混入
4層 褐色土(10Y R 1.7/1)地山砂少量混入
やや軟弱
5層 明黄褐色土(10Y R 6/6)地山ブロック
6層 褐色土(10Y R 1.7/1)地山砂、小ブロック
多量混入
7層 明黄褐色土(10Y R 6/6)地山ブロック
8層 暗褐色土(10Y R 2/2)地山砂、小ブロック
褐色土粒を含む
地山砂多量混入
9層 褐色土(10Y R 1.7/1)シルト質

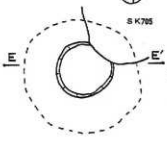
SK(F)704



D H: 178.3m D'



SK(F)705



E H: 178.4m E'



0 2m

第14図 フラスコ状土壌実測図(1)

積と判断した。

Ⅲd₂層上面より掘り込まれる壁はⅤ層上位までをその壁面とし、底面より内傾して立ち上がる。底面は平坦で堅くしまり、底面中央には長径28cm、深さ16cmのビットが確認された。遺構内より遺物は出土しなかった。

第706号フラスコ状土壇（第14図）

調査区中央部のZ A、A-58グリッドに位置し、Ⅲd₁層において地山ブロックの混入した黄色土の落ち込みを確認した。本土壇は第705号土壇と重複し、本土壇が古い。

底径144cm×144cm、確認面からの深さ128cmで、底面積は1.71㎡を計る。

堆積土は9ブロックに区分され、地山粒、ブロックが混入されていることから、人為堆積と判断した。

Ⅲd₁層よりⅣ層上面まで押し込まれる壁面は、底面より内傾して立ち上がる。

底面は平坦で、堅くしまる。

遺構内より遺物は出土しなかった。

第708号フラスコ状土壇（第15図）

調査区中央部のZ A-59グリッドに位置し、Ⅲd₁層上面において地山ブロックの混入した黒色土の円形プランを確認した。本土壇北西側には第701号フラスコ状土壇、南西側には第716号フラスコ状土壇が近接している。

口径80cm×78cm、底径160cm×160cm、確認面からの深さは122cmを測り、底面積は2.14㎡である。

堆積土は4ブロックに区分され、地山粒、ブロックが混入していることから、人為堆積と判断した。

底面より内傾して立ち上がる壁は、Ⅲd₁層上面より掘り込まれⅤ層上位までをその壁面とする。

底面は平坦で、堅くしまる。

遺構内より遺物は出土しなかった。

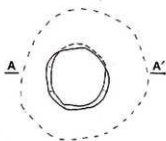
第711号フラスコ状土壇（第15区、17図14）

調査区西部のZ C-58、59グリッドに位置し、Ⅲd₁層上面において、地山粒の混入した黒色土の落ち込みを確認した。本土壇北東側には第717号フラスコ状土壇が近接している。

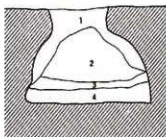
底径134cm×130cm、確認面からの深さ134cm、底面積は1.41㎡を測る。

堆積土は6ブロックに区分され、地山粒、砂礫が混入されていることから、人為堆積と判断

SK(F)708



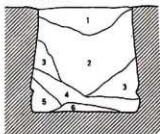
A H : 178.4m A'



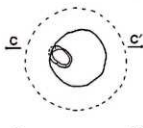
SK(F)711



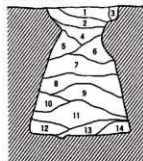
B H : 178.4m B'



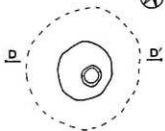
SK(F)716



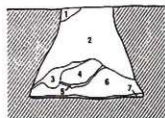
C H : 178.2m C'



SK(F)717



D H : 177.5m D'



SK(F)708

- 1層 黒色土(10Y R 2/1)地山ブロック多く含む
- 2層 暗黄褐色土(10Y R 5/6)地山土、砂礫を多く含む
- 3層 黒褐色土(10Y R 2/2)地山、黒色土塊を多く含む
- 4層 黒色土(10Y R 1.7/1)混入物ほとんどなし、粘性有

SK(F)711

- 1層 黒色土(10Y R 1.7/1)地山、粘質混入
- 2層 黒色土(10Y R 1.7/1)中や軟弱、地山砂少量混入
- 3層 黒色土(7.5Y R 1.7/1)地山粘質混入
- 4層 黒色土(10Y R 1.7/1)地山粘質混入
- 5層 黒色土(10Y R 1.7/1)地山ブロック、砂少量混入
- 6層 黒色土(7.5Y R 1.7/1)地山粘質混入、堅くしまる

SK(F)716

- 1層 黒色土(7.5Y R 2/1)地山砂、軽石粘質混入
- 2層 黒色土(10Y R 1.7/1)地山砂、軽石少量混入、砂が太く、堅くしまる
- 3層 黒色土(10Y R 1.7/1)地山粘質混入、中や軟弱
- 4層 黒色土(10Y R 1.7/1)地山粘質混入
- 5層 黒色土(7.5Y R 2/1)地山粘質混入、堅くしまる
- 6層 黒色土(7.5Y R 1.7/1)4層の上、砂少量混入
- 7層 黒色土(10Y R 1.7/1)地山粘質混入、中や軟弱
- 8層 黒色土(10Y R 1.7/1)地山砂少量混入、中央下部堅くしまる
- 9層 黒色土(10Y R 1.7/1)地山粘質混入、シラス少量混入
- 10層 黒色土(7.5Y R 1.7/1)シラス土少量混入、中や軟弱
- 11層 黒色土(10Y R 1.7/1)地山砂、地山ブロック粘質混入、堅くしまる
- 12層 黒色土(10Y R 1.7/1)地山砂、シラス粒多量混入
- 13層 黒色土(10Y R 1.7/1)地山粘質混入
- 14層 黒色土(10Y R 1.7/1)シラス粒多量混入、中や軟弱

SK(F)717

- 1層 黒褐色土(10Y R 2/2)シロト質、粘性有
- 2層 黒色土(10Y R 2/1)ローム砂、粘土粒少量混入、シロト質
- 3層 黒色土(10Y R 2/1)ロームブロック多量混入
- 4層 黄褐色土(10Y R 5/6)地山土
- 5層 黄褐色土(10Y R 2/2)黒色土を少量含む
- 6層 黄褐色土(10Y R 5/6)地山土
- 7層 黒褐色土(10Y R 2/2)黒色土を少量含む、堅くしまる

0 2m

第15図 フラスコ状土壌実測図(2)

した。

壁面はⅢd₁層上面より掘り込まれ、V層下位までとし、底面よりやや内傾して立ち上がる。

底面は平坦で堅くしまる。

堆積土中位より縄文時代後期の土器破片1点が出土した。

第716号フラスコ状土壙 (第15図)

調査区中央部のZ A、A-58グリッドに位置し、Ⅲd₁層上面において地山粒の混入した黒色土の落ち込みを確認した。本土壙南西側には第705号土壙、第706号フラスコ状土壙、北東側には第708号フラスコ状土壙、北西側には第701号フラスコ状土壙が近接している。

口径は70cm×70cmの円形を呈し、底径128cm×126cm、確認面からの深さ162cmを測り、底面積は1.28㎡である。

堆積土は14ブロックに区分され、地山粒が混入していることから、人為堆積と判断した。

Ⅲd₁層上面より掘り込む壁はV層下位までをその壁面とし、底面より内傾しながら口頸部へと立ち上がる。

底面は平坦で堅くしまり、中央よりやや東側寄りに32cm×20cmのビットが確認された。

遺構内より遺物は出土しなかった。

第717号フラスコ状土壙 (第15図)

調査区中央部のZ C-59グリッドに位置し、Ⅲd₂層上面において地山粒の混入した黒色土の落ち込みを確認した。本土壙南西側には、第711号フラスコ状土壙が近接する。

規模は、底径152cm×144cm、確認面からの深さ114cm、底面積1.72㎡を測る。

堆積土は7ブロックに区分され、地山粒、ブロックが混入されていることから、人為堆積と判断した。

底面より内傾して立ち上がる壁は、Ⅲd₂層上面より掘り込まれV層上位までをその壁面とする。

遺構内より遺物は出土しなかった。

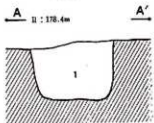
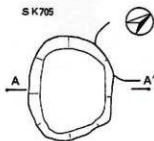
(花海鏡入)

(3) 土壙

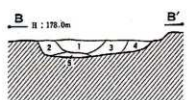
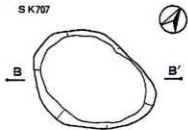
第705号土壙 (第16図、17図1～13)

調査区中央部、Z A、A-57、58グリッドに位置し、Ⅲd₁層上面において黒色土の落ち込みを確認した。第706号フラスコ状土壙と重複関係にあり、本土壙が新しい。平面形は92×68cmの楕円形を呈し、深さ61cm、底面積0.52㎡を測る。長軸方向はN-41°-Wである。

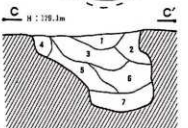
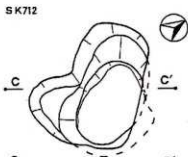
堆積土は黒色の単一層で、人為堆積と判断した。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がる。



SK705
1層 黒色土(10Y R1.7/1)

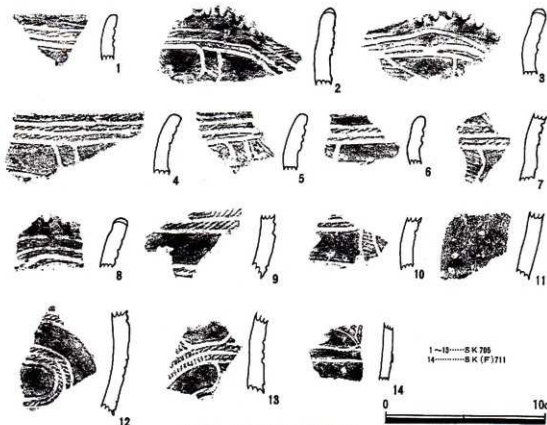


SK707
1層 黒色土(10Y R2/1)地山粒微量混入
2層 黒色土(10Y R2/1)地山粒、地山ブロック多量混入
3層 黒褐色土(10Y R2/2)地山粒多量混入
4層 黒褐色土(10Y R2/2)地山粒多量混入
5層 黒褐色土(10Y R2/2)地山粒多量混入、盛くしまる



SK712
1層 黒色土(10Y R1.7/)地山粒微量混入、やや軟弱、粘土質
2層 黒色土(10Y R2/1)地山粒多量混入、やや軟弱
3層 黒色土(10Y R1.7/)地山粒ブロック少量混入
4層 黒褐色土(10Y R2/2)地山粒多量混入、やや軟弱
5層 黒色土(10Y R1.7/)やや軟弱
6層 黒色土(10Y R1.7/)地山粒少量混入、やや軟弱
7層 黒色土(10Y R1.2/1)地山粒少量混入、粘質

第16図 土質実測図



第17図 遺構内出土土器拓影図

底面はV層上面より成り、大きな起伏があり堅くしまっている。

土壌内より、土器破片13点(第17図1~13)が出土した。1~13は波状口縁を呈する深鉢形土器の口縁部、胴部破片で同一個体のものである。主文様は帯縄文により曲線文が施文されており、沈線間にはL縄文が充填されている。波頂部には棒状工具による圧痕が施されている。焼成は良く、色調はにぶい橙色~褐色を呈する。

本土壌の構築時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

第707号土壌(第16図)

調査区南西部、A-56グリッドに位置し、Ⅲd₁層上面において地山粒が混入された黒色土の落ち込みを確認した。平面形は136×102cmの不整な楕円形を呈し、深さ20cm、底面積0.78㎡を測る。長軸方向はN-79°-Eである。

堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積と判断した。

壁はⅢd₁層上面より掘り込まれ、底面より緩やかに立ち上がる。底面はⅢd₂層上位より成り、中心部がやや凹んでいて堅くしまっている。

遺物は出土しなかった。遺構確認面及び周辺出土遺物より構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第712号土壌(第16図)

調査区北東端、Z A-63、64グリッドに位置し、V層上面において黒色土の落ち込みを確認した。本来の遺構構築面はⅢd₂層と思われるが、擾乱のため土壌上部が削平されている。

平面形は134×114cmの不整な楕円形を呈し、南側で長軸方向に対し直角に0.4m程張り出ししている。深さ86cm、底面積1.6㎡を測る。長軸方向はN-42°-Wである。

堆積土は7ブロックに区分され、人為堆積と判断した。

壁はV層上位までを壁面とし、外傾しながら立ち上がるが、東側では奥に向かって入り込んでいる。底面北側に、弧状に配置された6~20cm大の自然石6個が確認された。底面は鍋底状を呈し、軟弱である。

当初、本遺構の南側の張り出しは、他の土壌との重複または擾乱のために生じたものと考えられたが、土壌断面に重複がみられないこと、壁、床の状態から一つの土壌とみなした。

遺物は出土しなかった。遺構確認面及び周辺出土遺物より構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

(米田直毅)

第1表 遺物観察表(土器)

図版番号	PL番号	出土地点	部位	外 面		器厚 (mm)	胎 土	焼成	備 考
				文 様	色 調				
17-1	27-1	SK 705	口縁部	磨消縄文「L」	にょい褐色	8	砂粒	良	
2	2	SK 705	口縁部	磨消縄文「L」	にょい褐色	11	砂粒	良	
3	3	SK 705	口縁部	磨消縄文「L」	にょい褐色	9	砂粒	良	
4	4	SK 705	口縁部	磨消縄文「L」	橙 色	10	砂粒	不良	
5	5	SK 705	口縁部	磨消縄文「L」	橙 色	10	砂粒	良	
6	6	SK 705	口縁部	磨消縄文「L」	にょい褐色	9	砂粒	良	
7	7	SK 705	胴 部	磨消縄文「L」	にょい褐色	8	砂粒	良	
8	8	SK 705	口縁部	磨消縄文「L」	にょい褐色	10	砂粒	良	外面に炭化物付着
9	9	SK 705	胴 部	磨消縄文「L」	黒 色	10	砂粒	良	外面に炭化物付着
10	10	SK 705	胴 部	磨消縄文「L」	にょい橙色	8	砂粒	良	外面に炭化物付着
11	11	SK 705	胴 部	無文	にょい褐色	9	砂粒	良	外面に炭化物付着
12	12	SK 705	胴 部	磨消縄文「L」	黒 色	11	砂粒	良	外面に炭化物付着
13	13	SK 705	胴 部	磨消縄文「L」	にょい橙色	11	砂粒	良	
14	14	SK(F)711	胴 部	隆沈文	にょい橙色	7	砂粒	良	

4. 焼土遺構

第701号焼土遺構 (第18図)

調査区中央部、ZA-59グリッドに位置し、Ⅲd₁層上面において48×42cmの不整形を呈する焼土範囲を確認した。焼土の厚さは最大3cmを測る。

遺物は出土しなかった。遺構確認面及び周辺出土遺物より構築時期は、縄文時代後期と考えられる。

第702号焼土遺構 (第18図)

調査区中央部、ZA、A-60グリッドに位置し、Ⅲd₁層上面において54×46cmの不整形を呈する焼土範囲を確認した。焼土中央部32×20cmの範囲での焼土化が著しく、色調は褐色を呈する。焼土の厚さは5cmを測る。加熱の弱い部分には焼土粒が混入され、色調は黒褐色を呈する。

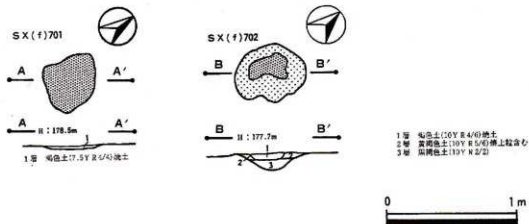
遺物は出土しなかった。遺構確認面及び周辺出土遺物より構築時期は、縄文時代後期初頭～前葉と考えられる。

(米田直毅)

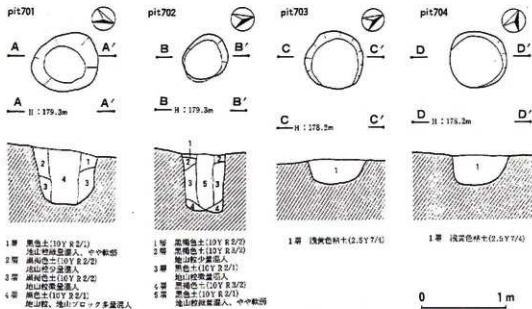
5. ビット (第19図)

調査区南西部、同北東端より4つのビット (701~704号)を確認した。

第701号、702号ビットは、Z A、Z B-64グリッドに位置し、Ⅲda層上面で確認した。第706号配石遺構東側に隣接する。ビットは径29~40cm、深さ33~35cmを測る。堆積土は5~8ブロックに区分され、ビット中央には柱痕が確認された。柱穴間は3.5mを測る。本来、この2つのビットは、これまでに確認された4本柱をもった建物跡と同様の配置を示すものであったと考えられる。しかし東半部のビットについては攪乱をうけ確認することができなかった。



第18図 焼土遺構実測図



第19図 ビット実測図

第703号、704号ピットは、ZA-56グリッドのⅢ_d層上面において確認した。ピット南側に第707号土壌が位置する。ピットは径34~36cm、深さ13~17cmを測る。ピット内には白色粘土が充填されていた。(藤井安正)

6. 遺構外出土遺物

(1) 土器 (第20図~28図)

G₁区遺構外からは、11個の復元可能な土器と段ボール箱2箱の縄文土器破片の出土があった。これらは数点の縄文時代早期の土器片を除き、後期初頭~前葉に位置付けられるものである。

土器の出土状況を観察すると調査区中央部に集中している。層位的には、明らかに擾乱と考えられるⅠ~Ⅱ層のものを除くと、後期初頭~前葉のものはⅢ_b~Ⅲ_d層、早期のものはⅢ_d層下位から出土している。なお、B-58グリッドのⅢ_b~Ⅲ_d層からは9個体の復元土器が径1m程の範囲に密集して出土した。

土器の分類に関しては、時期ごとに群別し、文様等で経分した。

第Ⅰ群 早期の土器

1類 貝殻文の土器 (第25図1・2)

1は、貝殻腹縁文が縦位・横位に施文された深鉢の口縁部である。2は、胴部破片で外面・内面には貝殻による条痕が認められるが、内面はその後ナデが加えられ、その痕跡が明確ではない。胎土には若干の砂粒を含み、植物繊維の混入は見られない。焼成は良好で、色調は浅黄色、灰黄色を呈する。

本類土器は、早期中葉に位置付けられるもので、吹切沢式に比定される。

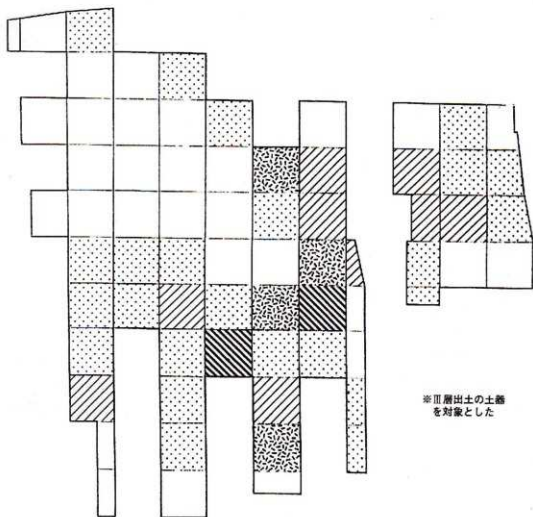
第Ⅱ群 後期前葉の土器

1類 隆沈文の土器 (第25図3)

隆沈文により文様が施文されるものである。3は、深鉢の胴部破片で、焼成は良好で、色調はふい黄褐色を呈する。


2類 沈線文の土器 (第25図4~26図26)

無文研削された器面に1~数条の沈線で文様を施文するものを一括した。本類には、深鉢、鉢、壺がみられる。文様帯は深鉢で胴部上半に、鉢では底部付近まで及んでいる。口縁部に長方形文(4~6)を施文するもの、3~5条の平行沈線(7、8)を施すものや花卉状文(15)を施文するものがある。16~26は同一個体で、「S」字状文を主文様とし、空白部には数条の沈線文・曲線文・S字文が付加されている。



※Ⅲ層出土の土器
を対象とした

 1～10個

 51～100個

 11～30個

 101～200個

 31～50個

 201個以上

第20図 土器分布密度図

3類 磨消縄文の土器（第21図、第22図4、26図27～27図51）

a. 主文様が等間隔に施文される土器（第21図3、22図4、26図27～27図37）

主文様として弧線文が多用されるほか花卉状文もみられる。文様が等間隔に配置されるため文様帯内は縦割りとなる。本類は波状口縁を呈する深鉢が主体となり、胴部上半に文様帯が限定される。

3は、波状口縁を呈する深鉢で、3～4条の沈線により口縁部・胴部上半に文様帯が区画されている。胴部文様帯には幾重にも重なる縦方向の弧線文を施し、口縁部には花卉状文と連続する山形状沈線文が施文されている。沈線間にはL縄文が充填されている。口径27.6cm、底径10.4cm、器高30.2cmを計る。焼成は良好で、色調は暗灰黄色を呈する。

4は、ゆるやかな波状口縁を呈する深鉢で、平行沈線により口縁部と胴部上半に文様帯が区画されている。胴部には花卉状文、口縁部には花卉状文と連続する山形状沈線文が施文されている。沈線間にはL R縄文が施文されている。口径20.5cmを計る。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。

27～34は同一個体である。深鉢で文様帯は胴部上半と口縁部に区画されている。文様帯内は、向かい合う弧線文で縦割り、その外部には短い直線文を幾重にも施文している。沈線間にはR L縄文が施文されている。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。

b. 主文様が横位に展開する土器（第21図1、2、27図38～44）

幾何学文・弧線文・入組状の曲線文が横位方向に施文される土器を一括した。本類には深鉢、鉢、壺があり、深鉢が主体となる。波状口縁を呈するものが多い。文様帯は胴部上半に区画されている。

1は、波状口縁を呈する鉢で、胴部上半に文様帯が区画されている。主文様として階段状文が施文されている。沈線間にはR L縄文が充填されている。口径19.9cm、底径6.8cm、器高13.0cmを計る。焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。

2は、波状口縁を呈する広口壺で、文様帯は胴部上半に区画されている。文様帯には2条の弧線文を背中合わせに連続施文し、磨消部には刺突文、沈線間にはL縄文が施文されている。口縁の頂部内面には花卉状文が付加されている。口径19.4cm、底径10.0cm、器高26.5cmを計る。焼成はやや不良で、色調は灰白色～暗灰色を呈する。38～44は壺の同一個体で、文様帯は胴部上半に区画されている。主文様として入組状の曲線文が施文され、沈線間にはL R縄文が施されている。

本類土器は、後期前葉に位置付けられるもので、東北地方北部の前十腰内・十腰内I式に比定されるものである。

第三群 後期中葉の土器

1類 磨消縄文の上器 (第27図52~58)

幅の広い帯縄文を特徴とするものを一括した。第II群3類とは縄文の節の大きさでも区別される。本類には壺、深鉢がみられる。主文様として幾何学文(55、56他)が施文されている。沈線間には単節の縄文が施文されるが、L・R縄文が多い。焼成は良のものが多く、色調はにぶい黄橙色、褐灰色を呈する。

本類土器は後期中葉に位置付けられるものと考えられる。東北地方北部の十腰内Ⅱ式に比定される。

第四群 後期前葉~中葉の土器

本類には、無文・擦糸文・縄文・条痕文土器のほか、特殊ものを一括した。

1類 無文の土器 (第22図5、24図、28図60~64)

本類には、浅鉢、鉢、深鉢のほか蓋、ミニチュア土器もみられる。

7~9は平口縁を呈する浅鉢、鉢で、口縁部は外反する。胴部は直線的に立ち上がるものと内湾気味に立ち上がるものがある。口径20.6~23.8cm、底径6.6~7.2cm、器高8.3~9.4cmを計る。焼成は良で、色調はにぶい黄橙色~褐灰色を呈する。

5は蓋で胴部下半は「ノ」字状に外反する。ていねいなミガキ後赤色顔料が塗布されている。底径20.4cm、器高12.2cmを計る。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色~黄灰色を呈する。

10はミニチュアの片口土器で、口径5.2cm、器高1.5cmを計る。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色~黒褐色を呈する。

11は、口縁部を欠く小型の深鉢である。

2類 擦糸文の土器 (第28図76~82)

単輪絡条体、網目状擦糸文が施文されているものを一括した。本類は深鉢が主体となる。口縁部が無文化されるものや境界文として沈線が施されるものがある。原体としてR縄文が多用される。焼成は良で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

3類 縄文の土器 (第22図6、28図65~75)

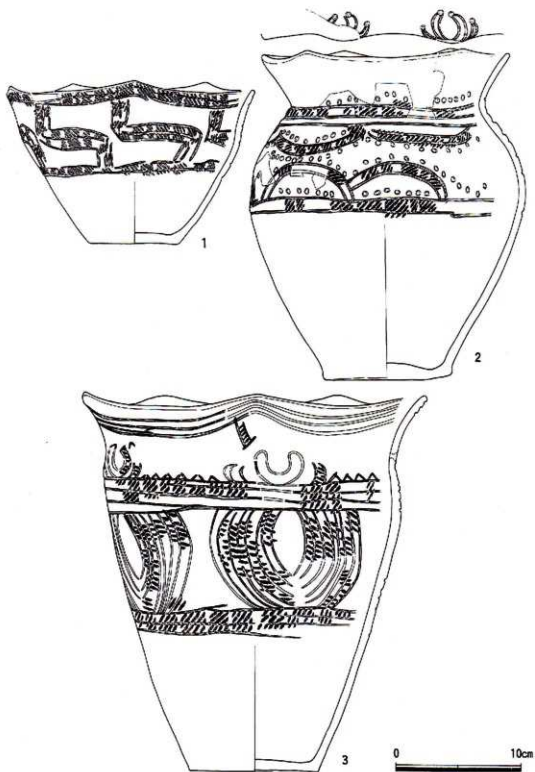
本類には、深鉢、壺がみられ、深鉢が主体となる。地文としてL・R・R・L・L縄文が使用されるが、L・R縄文が多い。

6は波状口縁を呈する深鉢で、口縁部は無文化され、胴部にはR・L縄文が施文されている。口径28.5cm、底径8.5cm、器高31.9cmを計る。焼成は良好で、色調は浅黄色を呈する。

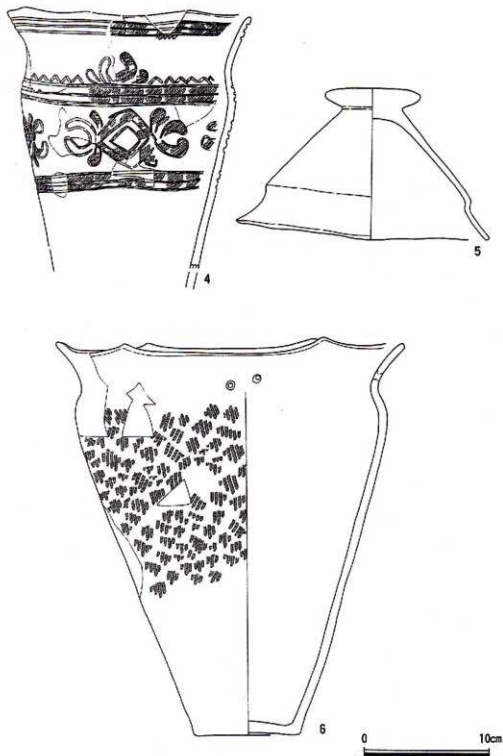
4類 条痕文の土器 (第28図83、84)

深鉢が主体となる。条痕は器面に対し縦位方向に施文される。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色~灰黄色を呈する。

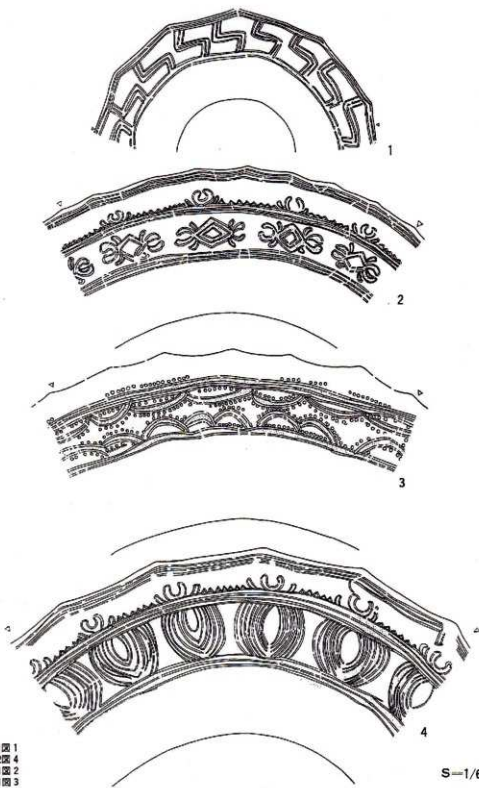
(藤井安正)



第21图 遼構外出土土器実測图(1)



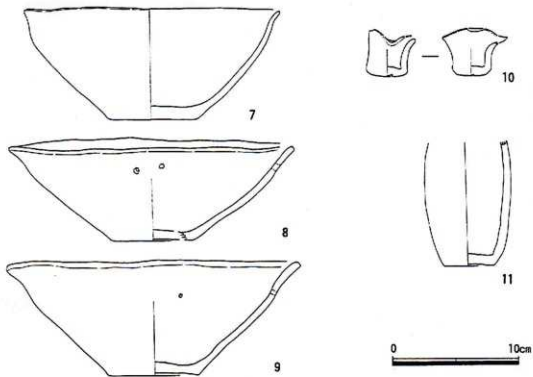
第22图 遺構外出土土器実測図(2)



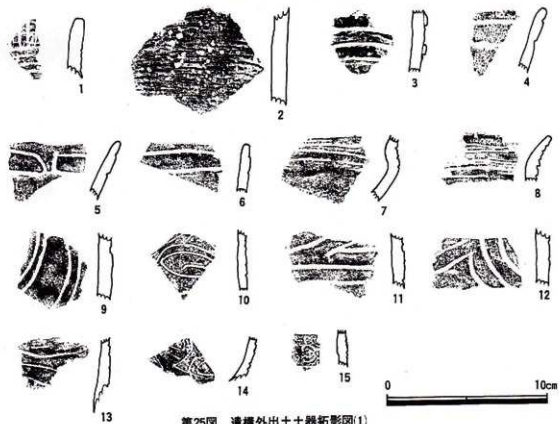
- 1...第21图 1
 2...第22图 4
 3...第21图 2
 4...第21图 3

S-1/6

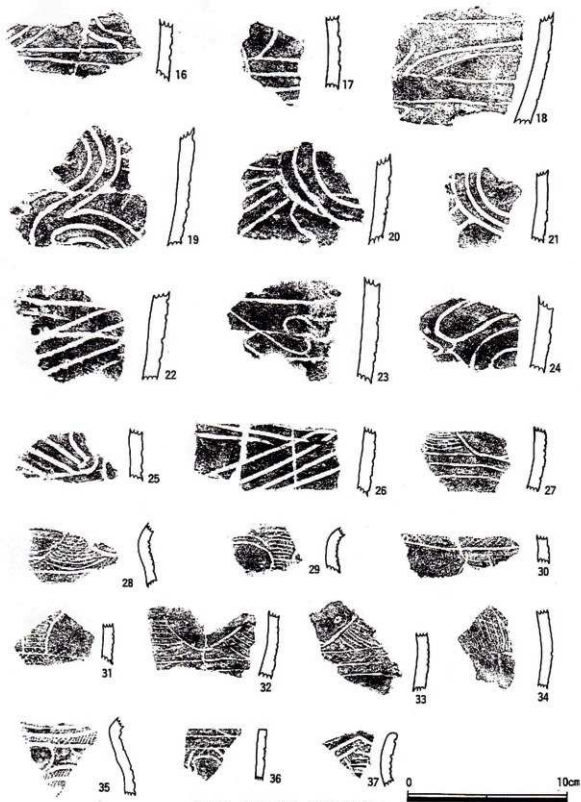
第23图 土器展開図



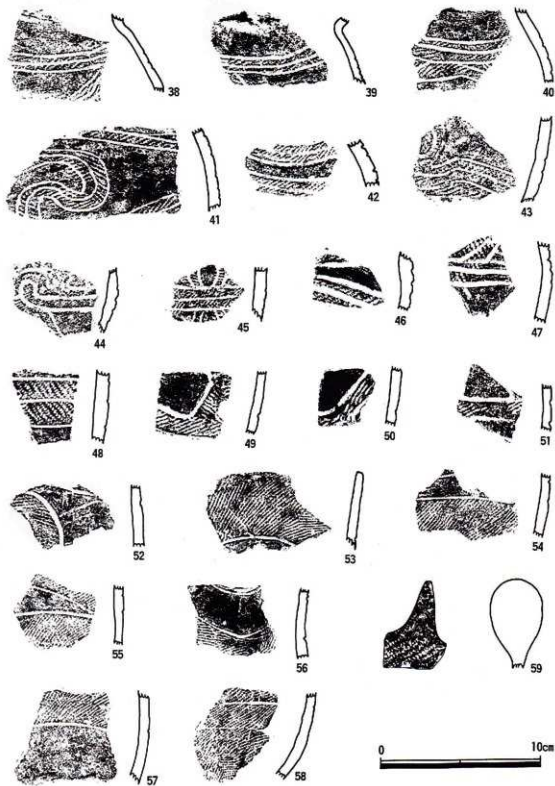
第24图 遗構外出土土器実測図(3)



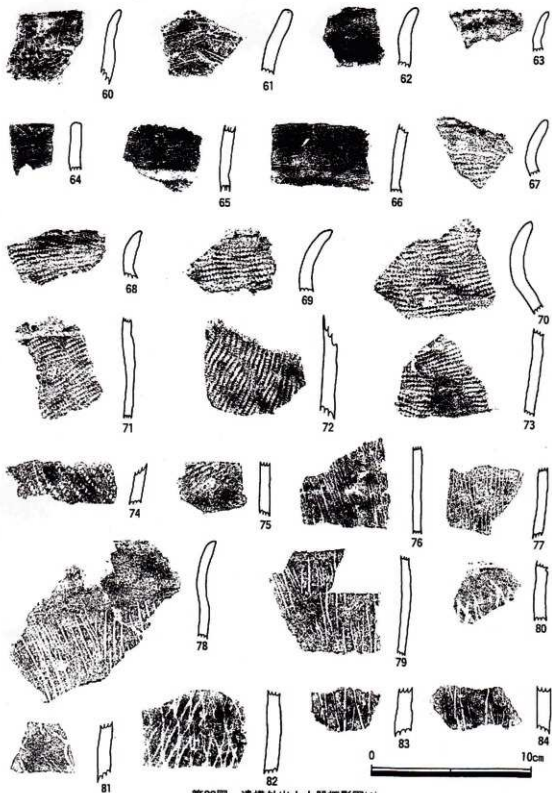
第25图 遺構外出土土器拓影図(1)



第26圖 遺構外出土土器拓影圖(2)



第27图 遗構外出土土器拓影图(3)



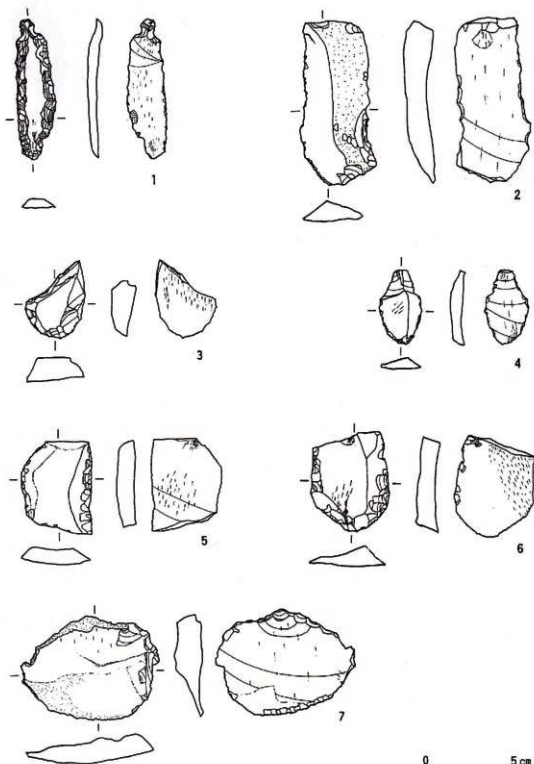
第28圖 遺構外出土土器拓影(4)

第2表 遺物観察表(土器)

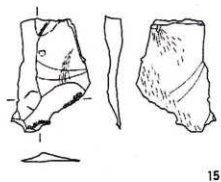
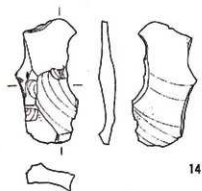
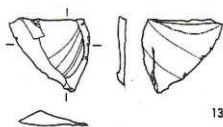
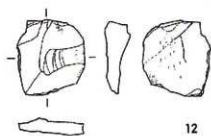
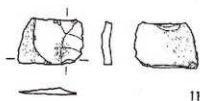
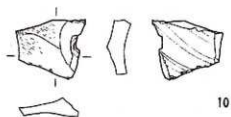
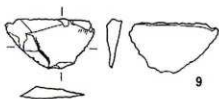
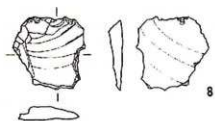
図版番号	PL番号	出土地点	部位	外面		器厚 (mm)	胎土	焼成	備考
				文様	色調				
25-1	29-1	Z B-62 IIIa下位	口縁部	貝殻文	灰黄色	9	砂粒	良	
2	2	Z B-62 IIIa下位	胴部	貝殻条痕	浅黄色	10	砂粒	良	
3	3	D-57 IIIa上位	胴部	蓮沈文	にぶい黄褐色	10	砂粒	良	
4	4	Z C-59 IIIb層	口縁部	沈線文	橙 色	7	砂粒	良	
5	5	Z C-59 IIIb層	口縁部	沈線文	灰黄色	7	砂粒	良	
6	6	Z C-59 IIIa上面	胴部	沈線文	橙 色	7	砂粒	良	
7	7	Z B-60 IIIa-b層	胴部	沈線文	にぶい黄褐色	8	砂粒	良	
8	8	Z B-60 IIIa-b層	口縁部	沈線文	褐灰色	8	砂粒	良	
9	9	Z C-59 IIIb層	胴部	沈線文	灰黄褐色	9	砂粒	良	
10	10	B-55 IIIa-b層	胴部	沈線文	にぶい黄褐色	6	砂粒	良	
11	11	A-59 IIIa-b層	胴部	沈線文	橙 色	8	砂粒	良	
12	12	A-60 IIIa-b層	胴部	沈線文	にぶい橙 色	9	砂粒	良好	
13	13	B-55 IIIa-b層	胴部	沈線文	にぶい赤褐色	8	砂粒	良	
14	14	B-55 IIIa-b層	胴部	沈線文	にぶい橙 色	6	砂粒	良	
15	15	B-58 IIIb層	胴部	沈線文	褐灰色	7	砂粒	良	
26-16	30-16	A-59 IIIa-b層	胴部	沈線文	橙 色	8	砂粒	良	
17	19	D-59 IIIa層	胴部	沈線文	橙 色	8	砂粒	良	
18	17	A-59 IIIa-b層	胴部	沈線文	明赤褐色	9	砂粒	良	
19	18	A-59 IIIa-b層	胴部	沈線文	橙 色	9.5	砂粒	良	
20	20	A-59 IIIa-b層	胴部	沈線文	橙 色	9.5	砂粒	良	
21	21	A-59 IIIa-b層	胴部	沈線文	橙 色	8.5	砂粒	良	
22	22	A-59 IIIa-b層	胴部	沈線文	明赤褐色	11	砂粒	良	
23	23	D-59 IIIa層	胴部	沈線文	橙 色	10.5	砂粒	良	
24	24	A-59 IIIa-b層	胴部	沈線文	明赤褐色	10	砂粒	良	
25	25	A-59 IIIa-b層	胴部	沈線文	橙 色	9	砂粒	良	
26	26	D-59 IIIa層	胴部	沈線文	橙 色	8	砂粒	良	
27	27	B-58 IIIb中下位	胴部	磨消縄文「LR」	にぶい黄褐色	7.5	砂粒	良	
28	28	B-58 IIIb層	胴部	磨消縄文「LR」	にぶい黄褐色	7.5	砂粒	良	
29	31-29	B-58 IIIb層	胴部	磨消縄文「LR」	にぶい黄褐色	8	砂粒	良	
30	30	B-58 IIIb層	胴部	磨消縄文「LR」	にぶい黄褐色	8	砂粒	良	

第3表 遺物観察表(土器)

図版番号	PL番号	出土地点	部位	外面		器厚 (mm)	胎土	焼成	備考
				文様	色調				
26-31	31-31	B-58 Ⅲb中-下位	胴部	磨消縄文「LR」	灰白色	7	砂粒	良	
32	32	B-58 Ⅲb層	胴部	磨消縄文「LR」	にぶい黄褐色	8	砂粒	良	
33	33	B-58 Ⅲb層	胴部	磨消縄文「LR」	にぶい黄褐色	7.5	砂粒	良	
34	34	B-58 Ⅲb層	胴部	磨消縄文「LR」	にぶい黄褐色	7	砂粒	良	
35	35	D-59 I層	胴部	磨消縄文「LR」	浅黄褐色	7	砂粒	良	
36	36	A-60 Ⅲa-b層	胴部	磨消縄文「LR」	にぶい黄褐色	6	砂粒	良	
37	39	B-58 Ⅲd層	胴部	磨消縄文「LR」	浅黄褐色	7	砂粒	良	
27-38	37	D-59 Ⅲd層	胴部	磨消縄文「LR」	浅黄色	6	砂粒	良	
39	38	D-59 Ⅲd層	胴部	磨消縄文「LR」	浅黄色	5	砂粒	良	
40	40	D-59 Ⅲd層	胴部	磨消縄文「LR」	浅黄色	6.5	砂粒	良	
41	41	D-59 Ⅲd層	胴部	磨消縄文「LR」	浅黄色	7.5	砂粒	良	
42	42	Z C-59 Ⅲa層	胴部	磨消縄文「LR」	浅黄色	9	砂粒	良	
43	32-43	A-58 Ⅲb層	胴部	磨消縄文「L」	灰褐色	7	砂粒	良	
44	44	A-60 Ⅲa-b層	胴部	磨消縄文「L」	浅黄褐色	7.5	砂粒	不良	
45	45	A-59 Ⅲb層	胴部	磨消縄文「L」	浅黄色	8	砂粒	良	
46	46	Z A-60 Ⅲa-b層	胴部	磨消縄文「RL」	にぶい黄褐色	10	砂粒	良	
47	47	A-59 Ⅲb層	胴部	磨消縄文「LR」	灰白色	7	砂粒	良	
48	48	Z A-60 Ⅲa-b層	胴部	磨消縄文「RL」	灰白色	9.5	砂粒	良	
49	49	A-60 Ⅲa-b層	胴部	磨消縄文「L」	橙 色	6	砂粒	良	
50	53	A-60 Ⅲa-b層	胴部	磨消縄文「L」	灰褐色	6.5	砂粒	良	
51	51	A-60 Ⅲa-b層	胴部	磨消縄文「L」	黒 色	5.5	砂粒	良	外面に炭化物付着
52	52	Z E-57 Ⅲb-d層	胴部	磨消縄文「L」	にぶい黄褐色	7	砂粒	良	
53	50	Z A-61 Ⅲb層	口縁部	磨消縄文「LR」	褐灰色	6	砂粒	良	
54	54	Z A-60 Ⅲa-b層	胴部	磨消縄文「LR」	褐灰色	6.5	砂粒	良	
55	55	Z A-60 Ⅲa-b層	胴部	磨消縄文「LR」	にぶい橙 色	6.5	砂粒	良	
56	56	Z C-64 Ⅲb層	胴部	磨消縄文「LR」	赤褐色	7	砂粒	良	
57	57	Z A-61 Ⅲb層	胴部	磨消縄文「LR」	にぶい黄褐色	6.5	砂粒	良	
58	33-58	Z A-60 Ⅲa-b層	胴部	沈線+縄文「LR」	浅黄褐色	7.5	砂粒	良	
59	59	D-59 Ⅲd層	口縁部	縄文「LR」	橙 色	32.5	砂粒	良	
28-60	60	Z C-60 Ⅲb層	口縁部	無文	浅黄褐色	8	砂粒	良	

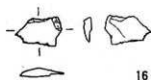


第30图 遼構外出土石器实例图(1)



0 5 cm

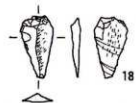
第31圖 遺構外出土石器実測図(2)



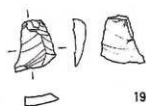
16



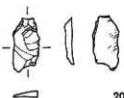
17



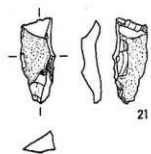
18



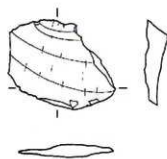
19



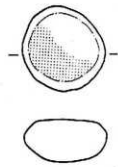
20



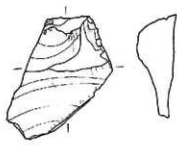
21



22



24

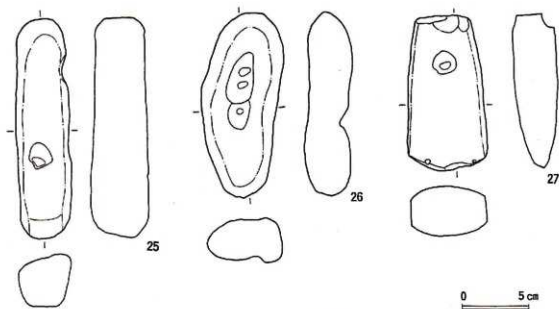


23

※スクリーン・トーン…使用面



第32図 遺構外出土石器実測図(3)



第33図 遺構外出土石器実測図(4)

した。つまみ部分から先端部にかけて長さが7.35cmの縦型石匙である。刃部は片面調整により作り出されている。重さ9.5gを測り、硬質頁岩を素材としている。

笊状石器 (第30図4)

調査区北部Z C-62グリッド、Ⅲa層より出土した。背面に剝離調整を施すもので、特に先端刃部が数回の剝離により念入りに作り出されている。石材は硬質頁岩で、長さ4cm、重さ4.8gを測る。

播器 (第30図2、3、5～7)

剥片の周縁及びその一部分に連続した調整剝離によって刃部が作り出されているものを一括して播器とした。表面に自然面を残しているものもあり、調整によりその素材を大きく変えているものはなかった。石材は凝灰質泥岩と硬質頁岩である。打面を上にして刃部の作り出される位置から以下のように類別した。なお、片面、両面調整による類別はしなかった。

a類……主要刃部が先端部に作り出されるもの(3、6、7)長さ3.9～7.2cm、重さ15.2～48.4gを測り、石材は硬質頁岩である。

b類……主要刃部が両側縁に作り出されているもの(2、5)長さ3.9～7.2cm、重さ20.4～47.5gを測り、石材は凝灰質泥岩である。

磨製石斧 (第33図27)

調査区南端C-55グリッド、Ⅲb層より出土した。全面研磨されており、断面形は隅丸長方形を呈する。基部は欠損しているが、残っている刃部をみると使用による磨減が観察される。基

第5表 遺物觀察表(石器)

圖版番号	P.L.番号	名称	出土地点	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
30-1	35-1	石匙	E-59・I層	7.35	2.0	0.6	9.5	硬質頁岩	
2	2	搔器	Z C-62・Ⅲa層	8.7	3.45	1.5	47.5	凝灰質泥岩	刃部先端欠損
3	3	搔器	E-57・Ⅲd層	3.9	2.95	1.3	15.2	硬質頁岩	
4	4	匙状石器	Z C-62・Ⅲa層	4.0	2.2	0.75	4.8	硬質頁岩	
5	5	搔器	Z A-60・Ⅲd上位	4.9	3.7	0.85	20.4	凝灰質泥岩	刃部先端欠損
6	6	搔器	B-60・Ⅲd層	5.05	5.6	1.1	25.8	硬質頁岩	基部欠損
7	7	搔器	Z A-63・Ⅲ層	7.2	5.4	1.27	48.4	硬質頁岩	
31-8	8	块入石器	A-60・Ⅱ層	3.8	3.8	0.8	11.8	硬質頁岩	
9	9	剥片	Z E-57・Ⅲb-d層	2.6	4.55	0.8	7.6	硬質頁岩	
10	10	剥片	Z B-52・Ⅲa-b層	3.3	3.4	1.1	12.6	硬質頁岩	
11	11	剥片	一括	2.4	3.3	0.4	3.7	硬質頁岩	
12	12	剥片	Z A-60・Ⅲa-b層	3.9	3.5	1.1	16.7	瑪瑙	
13	13	剥片	Z A-61・Ⅲb層	3.8	3.9	0.9	9.1	硬質頁岩	
14	14	剥片	Z D-63・Ⅲd層	6.4	2.8	2.7	21.1	硬質頁岩	
15	15	剥片	Z A-61・Ⅲb層	5.9	3.75	1.3	14.0	硬質頁岩	
32-16	16	剥片	A-60・Ⅲd上位	1.5	2.15	0.4	1.3	瑪瑙	
17	17	剥片	Z C-60・Ⅲb層	1.7	2.5	0.5	1.8	硬質頁岩	
18	18	剥片	A-60・Ⅱ層	3.2	1.5	0.5	1.9	硬質頁岩	
19	19	剥片	A-60・Ⅲd層	2.4	2.2	0.55	2.9	硬質頁岩	
20	36-20	剥片	B-59・Ⅲa層	2.6	1.3	0.4	1.6	硬質頁岩	
21	21	剥片	A-56・Ⅲb層	4.3	1.9	1.1	8.1	硬質頁岩	
22	22	剥片	B-58・Ⅲb層	4.5	5.3	1.1	24.2	瑪瑙	
23	23	剥片	A-57・Ⅲa層	5.75	4.2	2.7	61.9	硬質頁岩	
24	24	磨石	一括	4.2	4.35	2.15	57.1	泥岩	
33-25	25	凹石	C-57・Ⅲb層	16.2	4.2	4.5	370.0	凝灰質泥岩	
26	26	凹石	C-55・Ⅲa-b層	13.6	5.7	3.55	347.0	軽石質流紋岩	
27	27	磨製石斧	C-57・Ⅲb層	11.5	5.7	3.3	350.0	変朽安山岩	凹石に転用

部には凹みをもち、欠損後凹石として利用されたと考えられる。長さ11.5cm、重さ350gを測り、石材は変朽安山岩である。

凹石（第33図25、26）

調査区南端C-55、57グリッド、Ⅲa-Ⅲb層より出土した。25は凝灰質泥岩を石材とする棒状のもので、一面のみに凹みをもつ。長さ16.2cm、重さ370gである。26は扁平で両面に1～2個の凹みをもち、石材は軽石質流紋岩が使用されている。長さ13.6cm、重さ350gを測る。

磨石（第32図24）

形状は丸みを帯び、片面に磨痕がみられた。石材は泥岩で、長さ4.2cm、重さ57.1gを測る。

挟入石器（第31図8）

調査区南東部乙A-63グリッド、Ⅱ層から出土した。剥片の一部に数回の剝離による「えぐり」が確認されたことから挟入石器とした。長さ3.8cm、重さ11.8gを測り、石材は硬質頁岩である。

製片（第31図9～第32図23）

調査区南東より中央北東寄りにかけて、そのほとんどが出土した。石材は1点のみが瑠璃でその他は硬質頁岩である。(花海義人)

(3) 土製品

土器片利用の板状土製品（第34図1～5）

土器の破片を利用し、打ち欠き、研磨などの加工を施して円形、三角形、方形に整形しているものをいう。加工後の形状により「円板状土製品」、「三角形板状土製品」、「方形板状土製品」などに細分され、呼び分けられている。

本調査区遺構外より出土した板状土製品は5点である。これらは調査区南西側の小丘部の南北両斜面近辺から出土した。出土した板状土製品は深鉢形土器、壺形土器の胴部破片を使用し、打ち欠き、研磨により成形している。これらの文様には無文、縄文、沈線文があるが、形状、加工方法による差異は認めがたい。

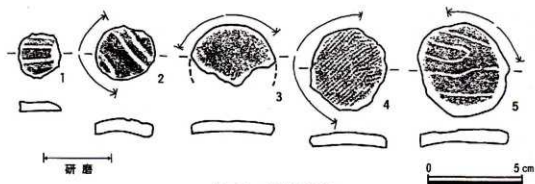
土器片利用の板状土製品については、報告書(2)において次のように形状、加工方法の違いにより分類されている。

I類…円形を呈するもの II類…三角形を呈するもの III類…方形を呈するもの
a類…全体及び一部を研磨加工しているもの b類…打ち欠き加工だけのもの

この分類方法に基づき、本調査区から出土した板状土製品を類別してみると、I_a類4点、I_b類1点となる。これまでの調査（1～7次）で、遺構外からの板状土製品の出土数は計1465点を数える。そのうちI_b類が51%、I_a類が25%である。形状に関しては円形のもの7割以上を占め、本調査区の結果と差異はない。加工方法の点では打ち欠き加工だけのものが63.5%で

あるのに対し、本調査区では20%と異なる結果を示している。

(米田直毅)



第34図 土製品実測図

第6表 遺物観察表(土製品)

図版番号	PL番号	出土地点	大きさ (mm)	厚さ (mm)	部位	文様	胎土	焼成	備考
34-1	36-28	B-56・Ⅱb層	23.0×21.5	4.5	胴部	沈線	稍良	良好	
2	29	B-55・Ⅱb層	31.0×27.5	5.5	胴部	沈線	砂粒多	良	縁辺の平面研磨
3	30	B-57・Ⅱb層	—	5.0	胴部	無文	稍良、砂粒多	良好	半分欠損、縁辺研磨
4	31	B-55・Ⅱa~b層	43.0×38.0	5.0	胴部	縄文(LR)	砂粒多	良	縁辺の平面研磨
5	32	Z C-59・Ⅲc層上面	51.0×45.0	6.0	胴部	沈線	稍良、砂粒多	良好	縁辺の一部研磨

第7表 板状土製品地区別出土数

	Ia	Ib	IIa	IIb	IIIa	IIIb	計
第1次 A ₁ 区	0	0	0	0	0	0	0
第2次 A ₂ 区	0	0	0	0	0	0	0
B区	71	299	9	9	26	24	438
第3次 A ₃ 区	1	1	0	1	0	0	3
C区	4	24	1	2	5	7	43
第4次 D ₁ 区	140	136	31	36	7	5	355
E ₁ 区	0	0	0	0	0	0	0
第5次 D ₂ 区	75	131	34	55	16	16	327
第6次 E ₄ 区	0	0	0	0	0	0	0
F ₁ 区	75	142	21	12	16	20	286
第7次 F ₂ 区	1	9	0	2	0	1	13
計	367	742	96	117	70	73	1,465

第IV章 自然科学的調査

1. 花粉分析からみた古環境について

(1) 試料及び処理方法

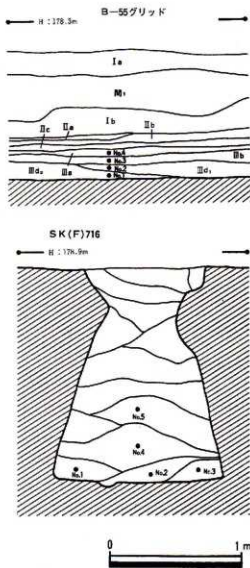
ここであつかった土壤試料は、砂質腐植土である。試料はⅢd (サンプルNo.1、2) Ⅲb (サンプルNo.3) Ⅲa (サンプルNo.4) の4点、フラスコ状ピットの基底より3点、下位とその基底から30cm上部、50cm上部より各1点、合計9点採取した。試料の処理は、土壤250gをビーカーに取り、HF処理→水洗い→アルカリ処理 (KOH) →水洗い→比重分離 (ZnCl₂) →水洗い→アセトリス処理→水洗い→封入の順に行い、プレパラートを作成した。

(2) 分析結果

花粉化石は当時の環境を推定するのに有効なデータになり得るが、酸化に弱く、黒土 (腐植土) 中には残っている割合が少ない。プレパラートの検鏡にあたっては通常400倍で行い、樹木花粉が250個以上計数するまで花粉・胞子を同定したが、出現数が少なくダイアグラムを作成することができなかった。

出現したのは樹木花粉11属、草本花粉3科で、その他未同定の花粉・胞子・腐植され形態が変化して同定不能の花粉があった。分析結果の特徴は、ブナ・コナラ (ミズナラ) 林の様相を示している。また、マツの花粉はその形態から二葉マツ類のもので、アカマツと考えられる。アカマツは二次林の主要構成種でブナ・ミズナラ・コナラ・ケヤキ等の落葉広葉樹林が大勢を占めていた中で、二次林も一定の広がりを見せていたものと考えられる。

黒土をもとにしたデータでは出現個数が少なく古植生を復元することは難しい。今回同時に行なったフラスコ状ピットの試料では出現個数



第35図 花粉分析サンプル採取地点

が少なく、ブナ属、コナラ属、ニレ・ケヤキ属の花粉だけ検出された。古植生の復原は、花粉化石の保存性のよい同時期の泥炭層の発見と分析によるしかないだろう。 (成田典彦)

第8表 検出された花粉化石の固体数

		マ ツ 属	ス ギ 属	ブ ナ 属	コ ナ ラ 属	ク リ 属	ク ナ ギ 属	ク マ シ デ 属	ニ レ ・ ケ ヤ キ 属	ハ ン ノ キ 属	オ ニ グ ル ミ 属	モ チ ノ キ 属	イ ネ 科	カ ヤ ツ ル グ サ 科	キ ク 科	胞 子
Ⅲa	No. 4	6	1	8	3	・	・	・	2	3	・	・	6	・	5	1
Ⅲb	No. 3	4	2	1	2	1	・	2	4	2	2	・	1	1	2	6
Ⅲd ₁	No. 2	2	・	3	・	1	・	・	3	3	2	1	2	1	1	7
Ⅲd ₂	No. 1	4	・	・	1	・	2	・	・	2	1	・	3	・	2	3

第V章 分析と考察

1. 配石遺構群について

今回の調査において7基の配石遺構を確認又は再確認した。第701・704号配石遺構は今回新たに確認したものである。なお、第702～707号配石遺構（704号を除く）は、昭和31年に十和田営林署が事務所兼住宅建設の際に行った整地作業中に発見されたもので、昭和38～39年に阿部義平氏によって実測、撮影されている。当時と今回の確認状況を見比べると、配石遺構群中央の石は移動がみられ、当時とは趣を異にしていた。

配石遺構の性格は、学会において注目されて以来諸説提示されてきた。昭和26～27年の大湯環状列石の国営発掘は、いわば提示された諸説（墳墓説・祭祀説）を一本化するためのものであった。その結果「下底に墳を有していることが普通であることの認められたことは、それを墓塚と見、組石を墓塚的なものと考えことに蓋然性もある」と述べ、遺跡・遺構の性格に迫ったが、墳墓説定着まで至らなかった。

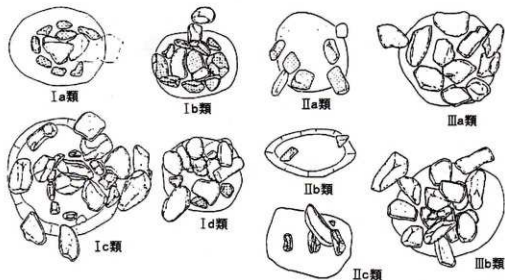
このような事から第1次～3次調査では野中堂環状列石北東約300mの配石遺構群の解明を主目的に行った。その結果、配石下には土壌が存在し、副葬品やカメ棺が伴うものもあること、さらに残存脂肪分析では高等動物に特徴的な脂肪酸が検出されたことから「配石墓」として捉えている。

構築時期については、出土遺物、遺構確認面（構築面）から縄文時代後期前葉と考えられる。

配石の形態については、第3次調査報告書で分類（第36図）を試みたが、現在のところ変更、補充する資料は見当たらない。

阿部氏作成の実測図（第11図）では外帯と内帯から成る配石遺構群を呈している。特に外帯を構成する配石の中央部には立石が存在することが注目され、A区配石群の外帯配石と趣を異にしている。配石中央に立石を置く例としてはIb類（A区16号配石）が存在するが、立石の頭がわずかに露出する程度である。又、万座・野中堂環状列石の立石をもつ配石をみても立石の半程が地中に没しており、立石のほとんどが露頭するのは「口時計」状組石ぐらいのものである。当時の実測図や写真、第705号配石の現状をみると立石はそのほとんどを露頭している。しかも同じく立石を持った第702号配石（E配石）の内部には平石が置かれ、立石を設定する隙間もない程である。このようなことから、本来は立石を持たないものであった公算が強く、阿部氏の指摘にあるように手が加えられた可能性が大きい。

この事由をふまえ、各配石の形態を観察していくと、いずれも配石の縁辺部に立石を巡らし、その内部に平石数個を置くといった構造を呈しており、分類Ia類として捉えることの出来るものである。



スクリーン・トーンは立石を表す

第36図 配石遺構形態分類図

なお、同図面には、内帯を構成する2~3基（F・G配石）の配石が存在している。これらの配石は図及び写真を見る限りでは整った形態を呈してはならず、今回の調査においては下部土壌を検出することができなかった。さらに阿部氏の指摘もあることから、これらは内帯を構成するものとは考え難いと思われる。

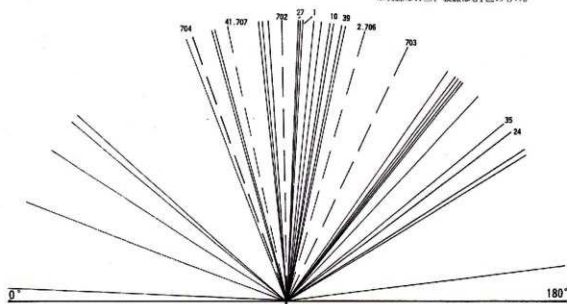
このようなことから、G₁区の配石遺構群はIa類タイプのものが緩やかな弧状を描くように配置されたもので、その径は推定で40mを測る。

G₁区の配石の配列は、A区配石遺構群外帯の配列に近似している。

下部土壌は、配石とその位置が一致する。平面形は楕円形を呈し、その規模は長軸73~155cm、短軸52~100cm、底面積0.81~3.72㎡を測る。長軸方向はN-0°~55°-Eである。今回の調査で窺えることは、土壌長軸と短軸の比率が大きくなり平面形が小判形に近い形態となること、第704号配石のように張り出した施設を持ったものが存在することである。張り出しについては、配石が土壌壁側に片寄り、予定した配石形態もしくは規模を設定しきれなかったことに起因するものと考えられる。

第37図は、G₁区の配石下土壌（701号配石を除く）の^(注2) 求心角をA区の資料に投影させたものである。求心角はほぼ2極に集中する。特にIa類では求心角90度を中心とした狭い範囲に集約する傾向が強く、求心線に対して長軸は直交する。類例としては万座環状列石近傍で確認された環1・2内の建物跡や高屋簷跡の環状に配置された建物跡と土坑、岩手県西田遺跡にもみられ、その長軸は環状列石又は円環の中心を意識した方向（求心線に対して平行・直交）を向い

※分類Ⅰa類のものはその番号を付した。
※実線はA区、破線はG₁区のもの。



第37図 配石下部土壌の求心角

ている。

このことから、G₁区（A区配石群外帯も含め）の配石下より確認された土壌長軸の方向決定には円環もしくはその中心という意志が働き、配置されたものと考えられる。

注2：求心角：A区・G₁区配石遺構群が弧又は円を描く配置を示すものとして、その中心を求め、それによって得られた求心線（遺構と円の中心を結ぶ線）と交叉する土壌長軸のずれた角度
(藤井安正)

2. フラスコ状土壌について

(1) 立地

フラスコ状土壌9基は、調査区南西側の小丘部地域に集中している。小丘部は第Ⅰ章基本層序でも述べたとおり、耕地整理により削平されているが、旧地形の最高部は現地形より約1.5m（第38図）高かったものと考えられる。しかし、本調査区でのフラスコ状土壌の深さは120～160cmであり、小丘部上部付近以外ではその痕跡を残すはずである。にもかかわらず、小丘斜面からもフラスコ状土壌の痕跡は確認されず、本調査区のフラスコ状土壌は小丘部縁辺に弧状に構築されたものと考えられる。小丘部に密集している例としては、F₂区があげられる。同区では単独に形成された小丘部に20数基のフラスコ状土壌が密集している。これも地形を考慮しての構築であろう。また、D₁区、D₂区では、フラスコ状土壌が現状列石の周囲に規則的に分布

しており、同列石を意識しての構築と考えられる。このようなことから、フラスコ状土壌はただ漠然と掘られたのではなく、地形、他遺構との位置関係を考慮し、場所を設定、規則的に構築されたものと考えられることができる。

(2) 形態

G₁区では、フラスコ状土壌9基のうち、底面中央付近にピットを有するものが5基確認された。第1次～8次までの調査では、86基のフラスコ状土壌が検出されているが、そのうち土壌底面にピットを有するものが23%、無いものが70%（第39図）である。次にそれを地区別に分けてみると、第40区のようになる。各地区により、ピットを有するものと無いものとの比率に差が生じるが、このことは地形的要因やフラスコ状土壌の用途の違いを反映しているものと考えられる。

(3) 規模・堆積土

底面積は、1.28～2.15㎡の範囲にあり、最大は第703号フラスコ状土壌の3.17㎡で、最小は第702号フラスコ状土壌の0.95㎡である。平均値は1.79㎡で、F₂区において確認されたフラスコ状土壌の平均値よりは0.6㎡狭い。深さは120～140cmで、最深が第703号フラスコ状土壌の160cmであった。また、径が60cm前後と頸部が比較的狭いものが多くみられた。

堆積土は、第716号フラスコ状土壌のように、地山粒の混入した黒色土が充填しているもの、上位に黒色土、中位に地山土が、そして下位にまた黒色土が堆積しているもの（第701、703、704、706、717号フラスコ状土壌）の2通りに大きく分けられる。いずれも人為地積によるものとした。また、第717号フラスコ状土壌の堆積土をふるいにかけてみたが、微量の炭化物以外は検出されなかった。

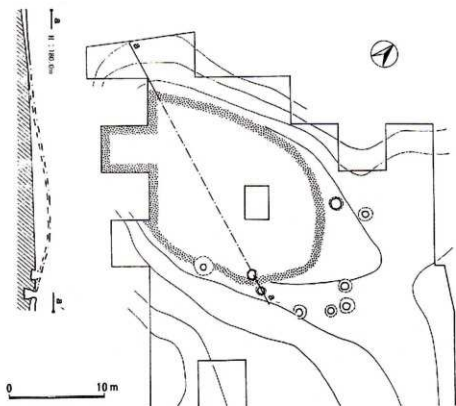
第711号フラスコ状土壌の堆積土からは縄文土器破片1点のみが出土し、その他の土壌からは検出されなかった。

G₁区でのフラスコ状土壌の構築時期は、第711号フラスコ状土壌出土遺物とその周辺遺構から、縄文時代後期前葉と考えられる。

(4) 第711号フラスコ状土壌について

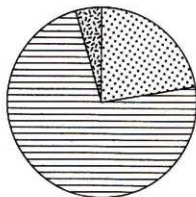
本調査区においては、今までに例のない形態のフラスコ状土壌が確認された。口径120cm×120cm、底径134cm×140cm、深さ134cmのフラスコ状を呈し、底部より26cm上に鈔鉄のくびれがみられる。フラスコ状土壌の重複かと検討したが、堆積土の観察から1つの土壌と判断した。この鈔鉄がどういう意味をもっているのかは資料の増加を待ち、検討課題としたい。

（花海義人）



第38図 G区旧地形復原図

第9表 フラスコ状土壇底部ビットの有無



 ビット有 20基 23.3%

 ビット無 61基 70.9%

 その他 5基 5.8%

合計値 86基

第10表 フラスコ状土壇底部形態分類表

区	ビット有	ビット無	その他	計
B ₁	4	3	1	8
D ₁		11	1	12
D ₂	4	21	2	27
F ₁	1	2		3
F ₂	6	21		27
G ₁	5	3	1	9
計	20	61	5	86

第Ⅵ章 調査のまとめ

特別史跡大湯環状列石は、米代川の一支流である大湯川の南東岸の台地上に位置する。大湯環状列石周辺の発掘調査は、昭和59年から継続されており、本年度で8年目を迎える。なお、平成2年3月に周辺遺跡の大部分が特別史跡に追加指定されたことから、第7次調査より報告書名を「大湯環状列石発掘調査報告書」に変更している。

第1～3次調査では、一本木後口配石遺構群（A区）の調査に主力が注がれ、これらの配石遺構群が配石墓群であることが確認され、さらに構造の類似する野中堂、万座の環状列石もまた配石墓の集合体であろうと推察されている。また、第4、5次調査では環状列石周囲には同心円（環）状に遺構が分布し、環状列石（墓域）の周囲に祭祀場域、居住域、遺物の廃棄域と続く環状集落の形態を呈するものと考えられた。

第6次調査では、万座環状列石の北北西150mの台地縁辺部（F₁区）から列石周辺としては初めての縄文時代後期の竪穴住居跡が検出され、7次のF₂区の調査により、これらの住居群が東側に広がり、径70m位の範囲に分布するものと予想されている。また、同調査区中央の小丘状の地域からはフラスコ状土壇24基が集中して検出され、その北東側からは北西—南東方向の帯状に分布するTピット群が確認されている。

これらの調査により、野中堂、万座環状列石の周囲及び北東側には建物跡、竪穴住居跡、フラスコ状土壇、Tピット等、様々な遺構が分布し、しかもそれらの遺構が群を構成、環状列石と直接あるいは間接的に関連ある配置を示すものと考えられている。

一方、両列石の南西側についてはほとんど調査が行われておらず、不明の点が多い。このため、本年度の調査は万座環状列石の南110～170mに調査区（G₁区）を設定した。昭和31年に配石遺構群の一部が確認されていた地区で、この度の調査の主目的はこの配石遺構群の広がり、形態及び性格を解明することであった。

調査の結果、G₁区からは縄文時代後期の配石遺構7基、Tピット1基、フラスコ状土壇9基、土壇3基、焼土遺構2基、ピット4個、礫群1ヵ所が検出された。また、遺構内・外から復元可能な縄文土器11個体、縄文土器片ダンボール箱2箱、石器及び剥片27点、土製品5点の出土があった。

配石遺構7基のうち6基は、調査区北東側に偏在している。いずれも楕円形に立石を巡らし、その内部に平石数個を置くという構造で、配石下には土壇を有している。

これらの配石遺構は弧状に配置されており、その曲率は径40m程である。配石遺構群の広がりについては北部及び西部が未調査のため明らかにできないが、南部の推定位置で同配石群が確認されていないため、少なくとも環状に一巡することはない。

本配石遺構群は、その配置及び個々の配石遺構の構造、長軸方向等の点で、一本木後口配石遺構群の外帯に類似している。しかし、内帯に相当する配石遺構群が検出されておらず、一本木後口配石群とは様相を異にする。弧線上に一列に並ぶ配石遺構群となるのか、その外側に配石群が伴うのかについては、今回の調査では明らかにできない。しかし、いずれにしても、配石遺構群の集合体であること、円（環）を意識した配置である等の共通性を持ちながらも、野中堂・万座環状列石や一本木後口配石遺構群とは形態を異にする第3の配石遺構群と言える。

フラスコ状土壇9基は、調査区南西側に偏在し、小丘状地形の西側を除く縁辺部に半円状に分布している。小丘との関連という点ではF₂区のフラスコ状土壇群に類似するが、F₁区の場合小丘全域に密集しているのに対し、本調査区では縁辺部に限定されている。

口径より底径が大きいために、フラスコ状土壇に一括したが、第711号フラスコ状土壇は、底部より26cm上の部分の壁が鈎状の張り出しを持つこと、口径・底径差が小さいこと等から、他のフラスコ状土壇と区別される。本遺構の特徴と言える鈎状張り出し部分に、この遺構の用途を探る糸口があらう。

本調査区からの出土遺物は、遺構内・外とも少ない。これは本地域に分布する遺構や領域の性格を反映しているものと考えられ、配石遺構群域の状況はA区やD₁区北西部と、フラスコ状土壇群域の状況はF₂区のフラスコ状土壇群域に似ている。

このような出土状況の中で、フラスコ状土壇群域の南東側隣接地（B-58グリッド）において9個の復元可能な縄文土器が密集して出土したことは特異である。Ⅲb層での確認であり、掘り込みが確認できないことから、フラスコ状土壇等の構築面であるⅢd₁層上面に何らかの目的を持って意識的に置かれたものと考えられる。

縄文土器のほとんどは後期前葉に位置づけられるが、他に早期中葉、後期中葉の土器の出土があった。早期の土器は、これまでF₁区、D₁区北西部等、万座環状列石北側からの出土が知られていたが、今回の調査によって、より広範囲に分布するものと考えられる。

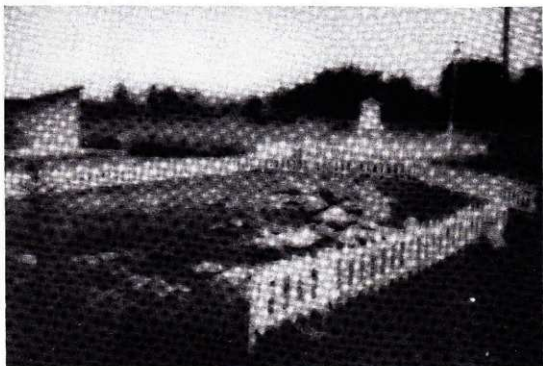
(秋元信夫)

参考・引用文献

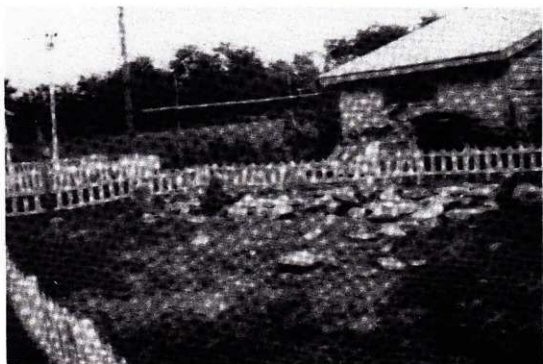
- 阿部義平 「“日時計”の考察—大湯環状列石の配石類型の意味」
『よねしろ考古』第2号 1986年
- 加藤晋平・鶴丸俊明 『図録 石器の基礎知識Ⅰ・Ⅱ』 柏書房 1980年
- 林 謙作 『縄文期の葬制 第Ⅱ部』 『考古学雑誌』第63巻3号 1977年
『東日本縄文期葬制の変遷（予察）』 『人類学雑誌』第88巻3号 1980年
- 鈴木道之助 『図録 石器の基礎知識Ⅲ』 柏書房 1981年
- 鈴木保彦 『集落の構成』 『季刊考古学』第7号 雄山閣 1984年
- 高樫泰時 『貝殻沈線文系土器様式』 『縄文土器大観』第1巻 小学館 1989年
- 水野正好 『環状列石の意味するもの』 『信濃』第20巻4号 1968年
『ストーンサークルの意義』 『季刊考古学』第9号 雄山閣 1984年
- 秋元信夫 『環状列石と建物跡—大湯環状列石近傍に分布する建物跡の分析』
『よねしろ考古』6号 1990年
- 文化財保護委員会 『大湯町環状列石』 1953年
- 青森県教育委員会 『大石平遺跡』 1987年
『妻館Ⅰ遺跡Ⅲ』 1987年
- 秋田県教育委員会 『高屋館跡』 『西山地区農免農道整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』 1990年
- 岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財センター
『間館Ⅰ遺跡』 1990年
『駒板遺跡 第3分冊』 1989年
- 岩手県教育委員会 『西田遺跡』 1980年
- 東北歴史資料館 『里浜貝塚Ⅲ』 1984年
- 鹿角市教育委員会 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)~(6)』 1985~1990年
『大湯環状列石発掘調査報告書(7)』 1991年



PL 1 大湯環状列石全景

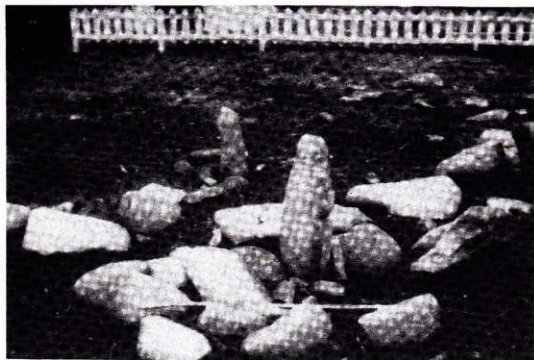


配石遺構群 (昭和38~39年当時)

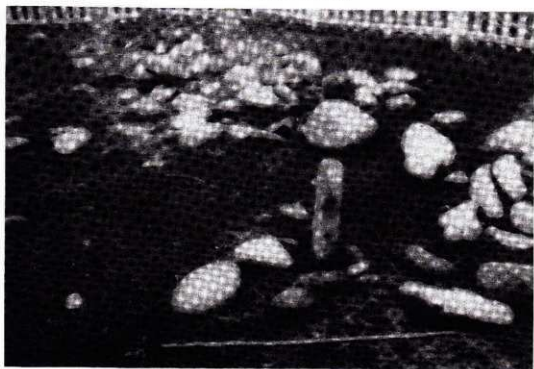


配石遺構群 (昭和38~39年当時)

P L 2 配石遺構群 (昭和38~39年当時)



配石遺構群 (昭和38~39年当時)



配石遺構群 (昭和38~39年当時)

PL 3 配石遺構群 (昭和38~39年当時)



第701号配石遺構



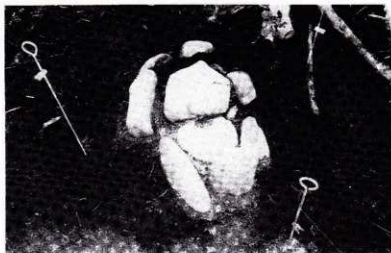
第701号配石遺構
断面



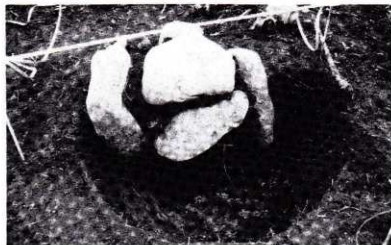
第701号配石遺構
下部土境

PL.4 配石遺構(1)

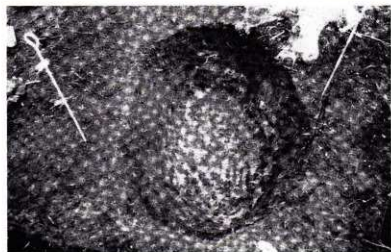
第702号配石遺構



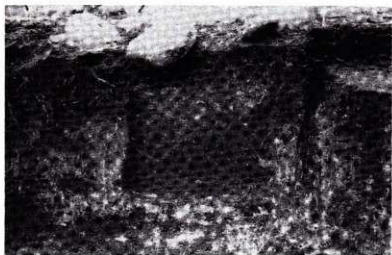
第702号配石遺構
断面



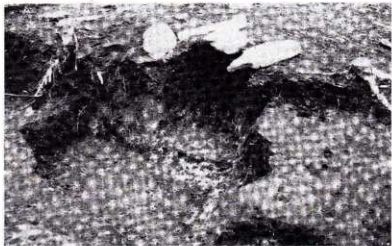
第702号配石遺構
下部土層



PL 5 配石遺構(2)



第703号配石遺構
断面



第703号配石遺構
下部土壌



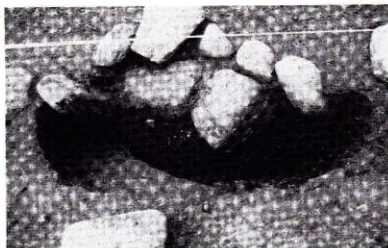
第703号配石遺構
下部土壌

PL 6 配石遺構(3)

第704号配石遺構



第704号配石遺構
断面



第704号配石遺構
下部土痕



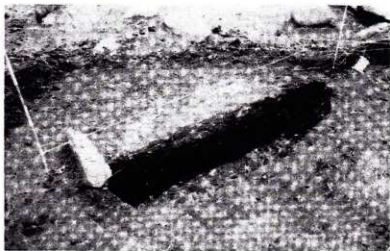
PL 7 配石遺構(4)



第704号配石遺構



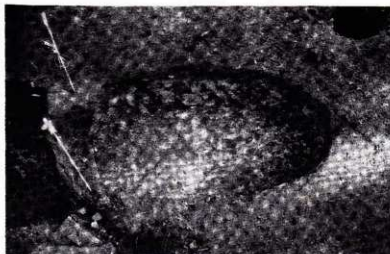
第705号配石遺構



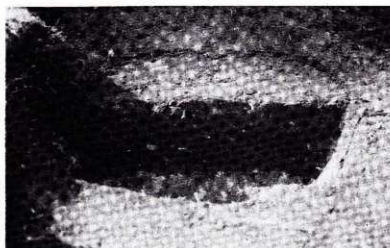
第706号配石遺構
断面

PL 8 配石遺構(5)

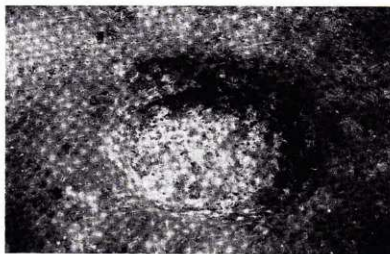
第706号配石遺構
下部土壤



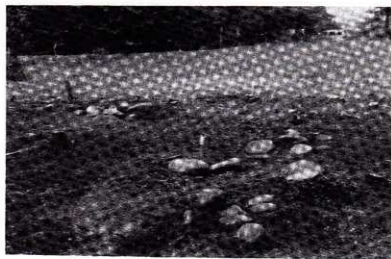
第707号配石遺構
断面



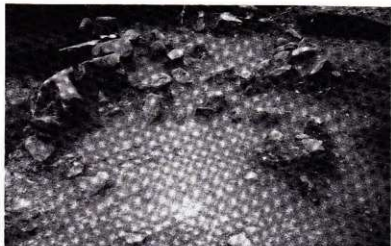
第707号配石遺構
下部土壤



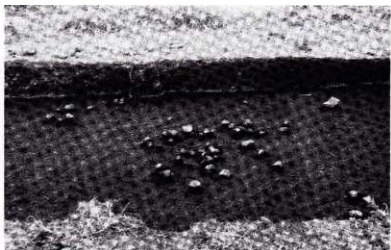
PL 9 配石遺構(6)



調査区北東側配石遺構群
(除草後)



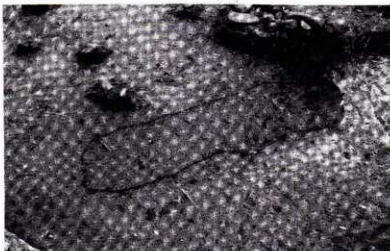
調査区北東側配石遺構群
(調査中)



礫 群

PL10 調査区北東側配石遺構群・礫群

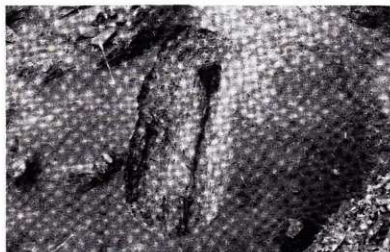
第715号Tビット
確認状況



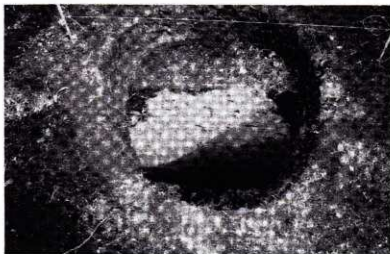
第715号Tビット
断面



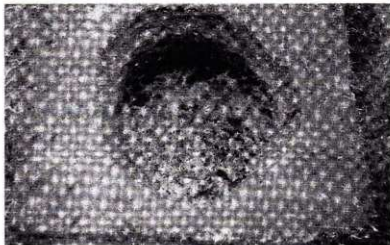
第715号Tビット



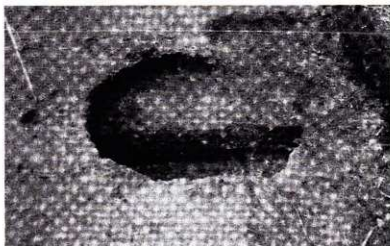
PLII Tビット



第701号
フラスコ状土壌断面



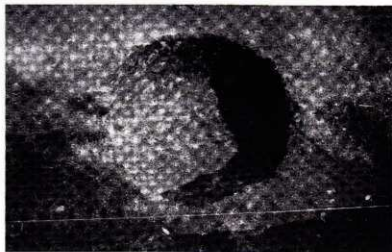
第701号
フラスコ状土壌



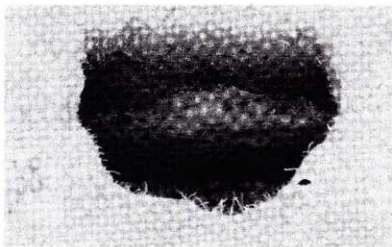
第702号
フラスコ状土壌断面

PL12 フラスコ状土壌(1)

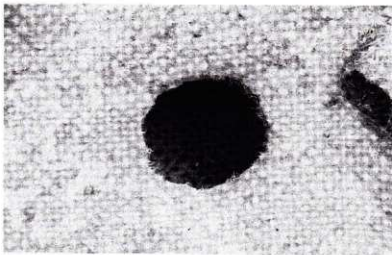
第702号
フラスコ状土壌



第703号
フラスコ状土壌
断面



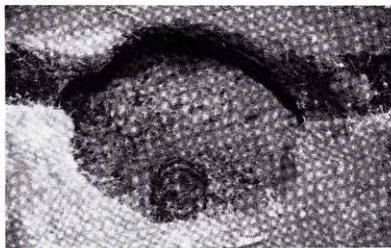
第703号
フラスコ状土壌



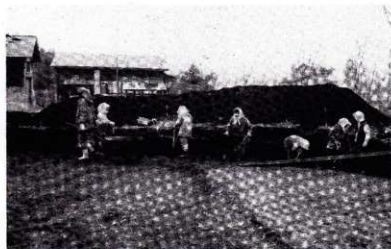
PL13 フラスコ状土壌(2)



第704号
フラスコ状土壌断面



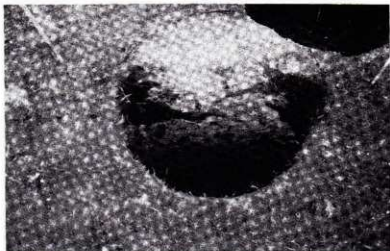
第704号
フラスコ状土壌



作業風景

PL14 フラスコ状土壌(3)

第706号
フラスコ状土壌
断面



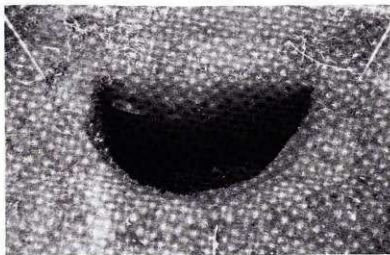
第706号
フラスコ状土壌



第708号
フラスコ状土壌



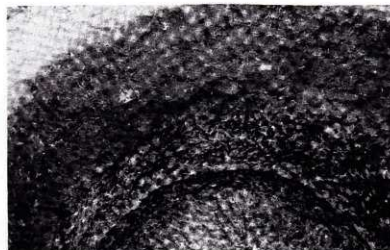
PL15 フラスコ状土壌(4)



第711号
フラスコ状土壌断面



第711号
フラスコ状土壌

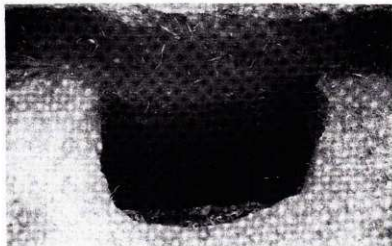


第711号
フラスコ状土壌

PL16 フラスコ状土壌(5)

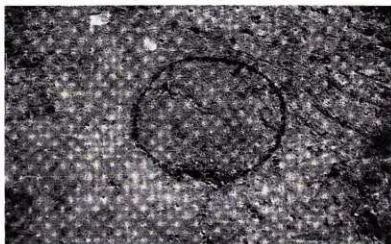
第716号

フラスコ状土壇断面



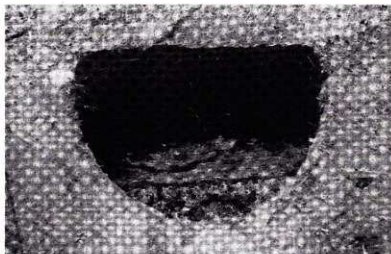
第717号

フラスコ状土壇確認
状況

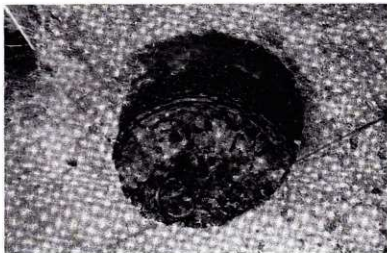


第717号

フラスコ状土壇断面



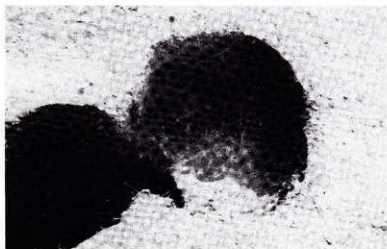
PL17 フラスコ状土壇(6)



第717号
フラスコ状土塊



第705号土塊断面



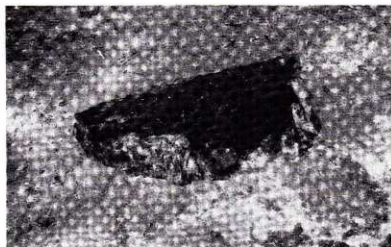
第705号土塊

PL18 フラスコ状土塊(7)・土塊(1)

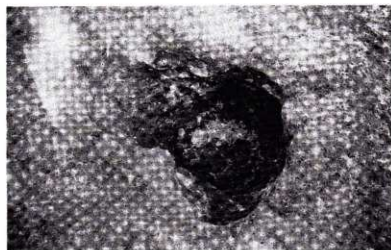
第707号土壤



第712号土壤
断面



第712号土壤



PL19 土 壤(2)



第702号焼土遺構



第702号焼土遺構断面



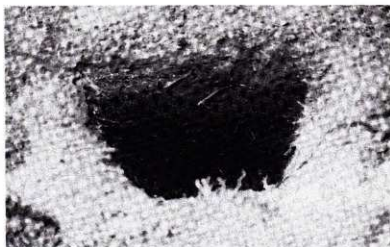
第701号ビット断面

PL20 焼土遺構・ビット(1)

第701号ビット



第702号ビット
断面



第702号ビット



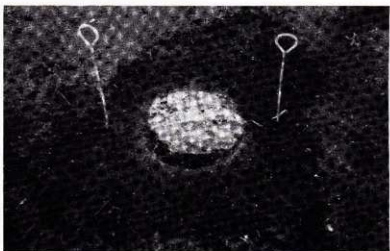
PL21 ビット(2)



第703号ビット



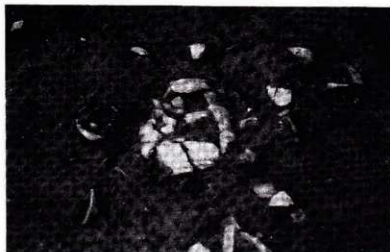
第704号ビット



第704号ビット
断面

PL22 ビット(3)

土器出土状況
(B-59 IIIb層)



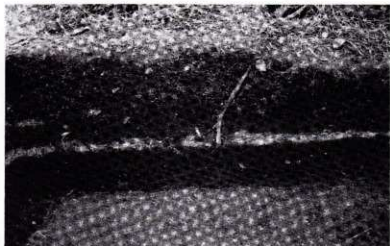
土器出土状況
(B-59 IIIc層)



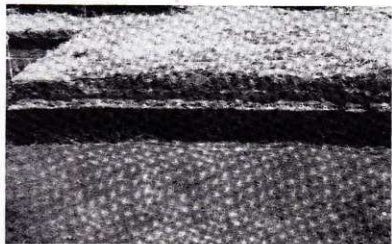
調査参加者



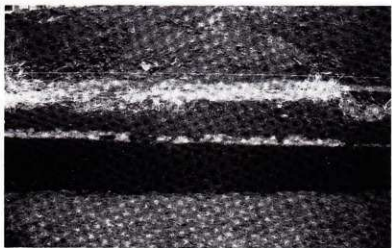
PL23 土器出土状況



基本層序 ZD-61



基本層序 ZE-55



基本層序 ZE-57

PL24 基本層序

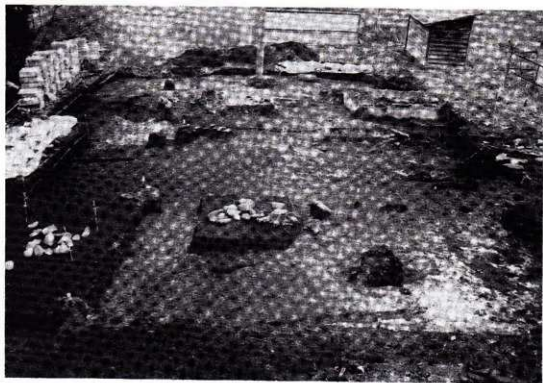


調査区北東側配石遺構群近景 (調査中)



調査区北東側配石遺構群近景 (調査後)

P L 25 調査区北東側配石遺構群近景

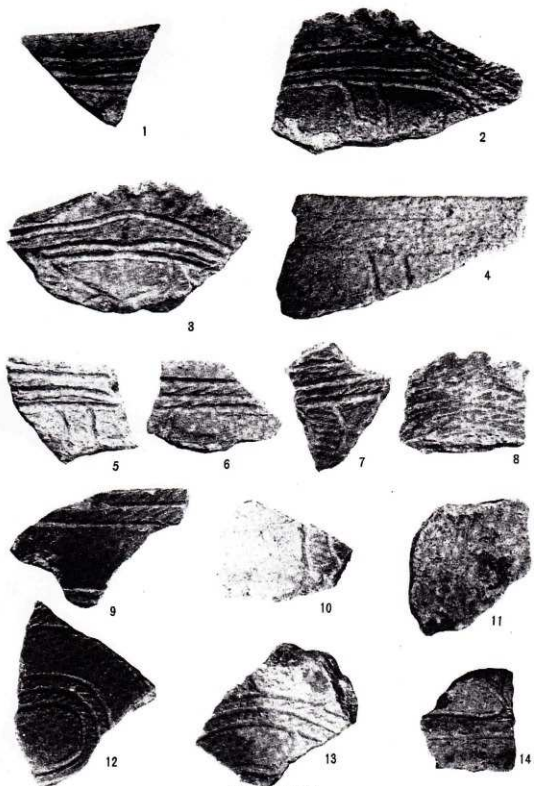


調査区北東側全景 (調査後)



調査区南西側全景 (調査後)

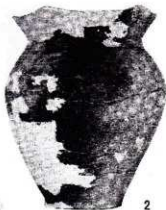
PL26 調査区全景 (調査後)



PL27 遺構内出土土器



1



2



3



4



5



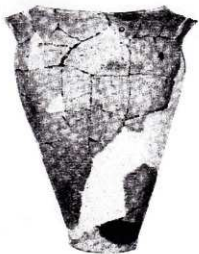
10



7



11



6

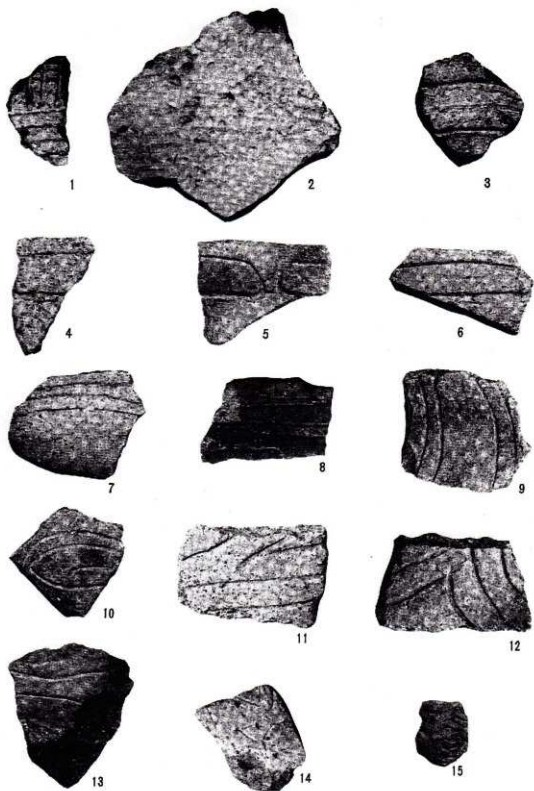


8



9

PL 28 遺構外出土土器(1)



PL.29 遺構外出土土器(2)



16



17



18



19



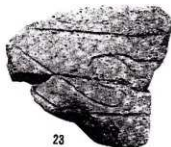
20



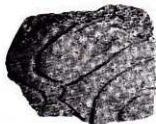
21



22



23



24



26



27

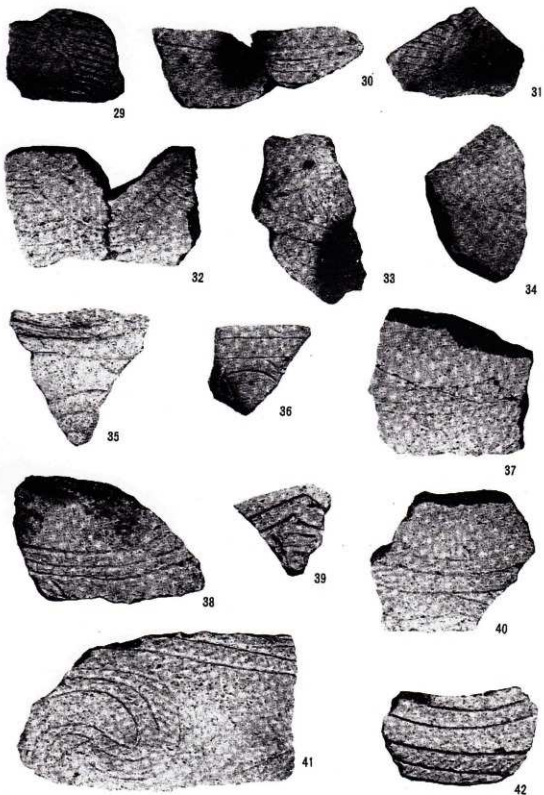


25



28

PL30 遺構外出土土器(3)



PL31 遺構外出土器(4)



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



57

PL32 遺構外出土器(5)



58



59



60



61



62



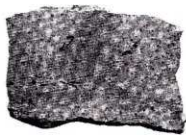
63



64



65



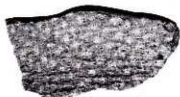
66



67



68



69



70



71

PL 33 遺構外出土土器(6)



72



73



74



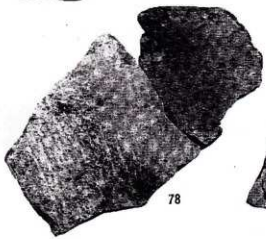
75



76



77



78



80



79



81



82

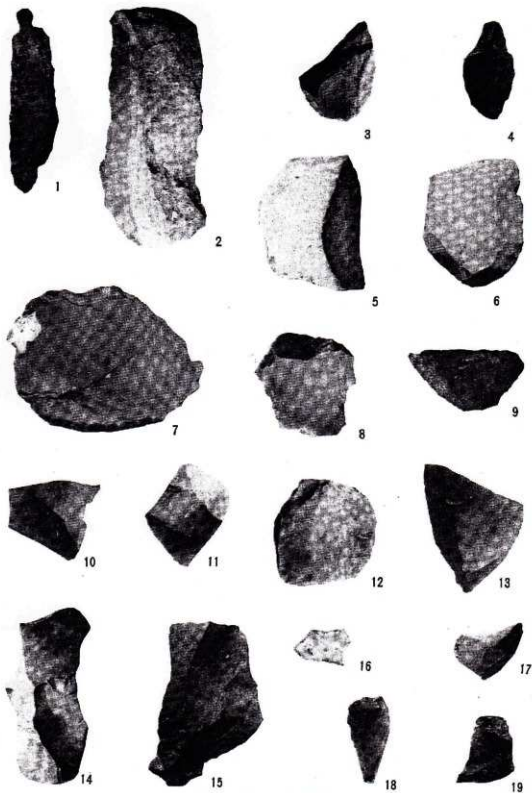


83

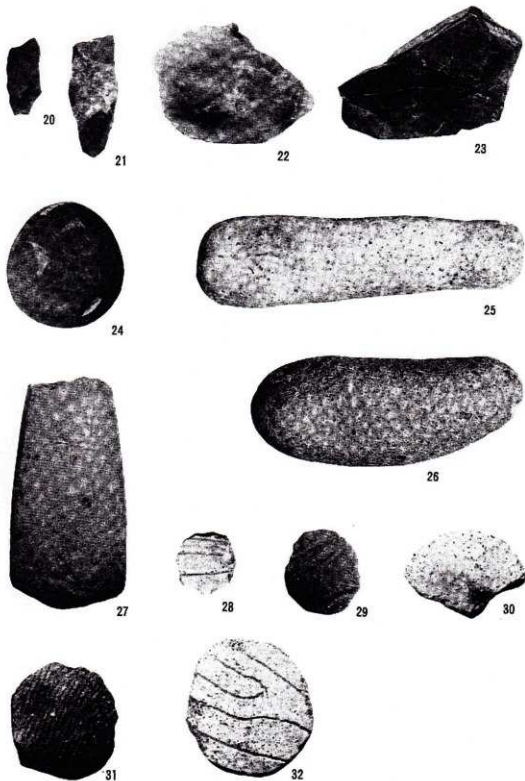


84

PL.34 遺構外出土土器(7)



PL35 遺構外出土石器(1)



PL 36 遺構外出土石器(2)・土製品

鹿角市文化財調査資料43集

大湯環状列石発掘調査報告書(8)

発行年月日 平成4年3月31日

発行者 鹿角市教育委員会

〒018-52

秋田県鹿角市花輪字荒田4-1

TEL 0186-23-5111

印刷所 (有)大館孔版社
